



# ESD 2014

## 地域に何を残し、今後どう動くか

2005年にスタートした国連持続可能な開発のための教育の10年が終了する。この10年間でESDはどのように実践され、普及したか。そして、その成果を今に積み重ね、2014年以降どのような活動、事業展開をすべきか。多様なステークホルダーと語り合い、ポスト2014にすべきことを明らかにした。

**日時：2014年6月14日（土）10:00～16:00**

**場所：中部大学名古屋キャンパス(名古屋市中区) 参加者 141名**



主催：環境省中部環境パートナーシップオフィス  
共催：中部ESD拠点、なごや環境大学、  
認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議  
後援：愛知県、名古屋市、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会  
連携協力：ESDユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会

## 目次

<b>分科会レポート</b> .....	<b>2</b>
第 1 分科会「若者×ESD=未来」.....	2
第 2 分科会「ESD(答えのない)授業をつくる～学校でいかに展開するか」.....	8
第 3 分科会「ESD、なごや環境大学の担う役割」.....	14
第 4 分科会「ESD 推進の開催地モデルを考えよう！」.....	18
<b>対談「どう行動するか～ポスト 2014」レポート</b> .....	<b>21</b>
<b>円卓会議「これからの ESD～グローバルアクションプランとともに」レポート</b> .....	<b>29</b>
<b>参加者からのメッセージ</b> .....	<b>37</b>
<b>アンケート結果</b> .....	<b>39</b>
<b>新聞掲載記事</b> .....	<b>46</b>



## 第1分科会「若者×ESD=未来」

(名古屋わかもの会議+WeChubu 企画・運営)

参加者 34名 ゲスト 8名 スタッフ 3名 合計 45名

私たち若者には未来があります。そして、次の世代を担っていかなければなりません。この分科会は若者がESDとはなにかを考えるキッカケを創造します。若者はもちろんコメントーターの大人を交え、考えることで、新たな視点が生まれてくるのではないのでしょうか？みなさんで未来のこと考えてみませんか？

### ●コメントーター

伊藤通子さん (東京大学大学院新領域創成科学研究科環境システム学専攻特任研究員)

鳥原由美さん (株式会社マルワ・HIME 企画代表)

岩崎光成さん (ESD ユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会会議支援グループ主査)

### 【実施プログラム】

#### 1. 話題提供

##### (1)河村俊秀さん(Candle Night Nagoya 実行委員会副代表)

東日本大震災を風化させないためにイベントを企画・実行をしている。イベントの際に被災地を実際に巡った感想を皆に伝え、どんなことも自分ごとにする大切さを訴えることを大事にしている。「悲劇的な光景に何も感じなくなっていた」という被災者の言葉が特に印象に残っている。

- ・キャンドルナイトの活動
- ・被災地を巡った感想
- ・防災と自分の関わりについて
- ・自分ごとにする大切さ

##### (2)愛知県立豊田東高等学校

濱村ジェイソンさん (3年生) 深田陵さん (3年生) 中垣早尊さん (2年生)

えっ (E)、そんなこと (S)、できちゃうの (D) という独自の目線で、総合学科ならではの学習と実践がつながったESD活動に取り組んでいる。例としては、ジビエと地域活性化に貢献した「いのちもちもち」は調理・栄養プランの学生が献立し、商品化された。他にもマレーシアへの修学旅行を通しての国際理解やビオトープ調査など、生徒が所属する学科に関係のある地域、国際交流、環境分野で熱心に活動していることを知ることができた。

- ・豊田東高校のESD活動報告
- ・地域分野、国際交流分野、環境分野

##### (3)水野翔太さん (名古屋わかもの会議代表)

「愛知・名古屋をわかものから盛り上げる」ことをテーマに、地域活性化活動を行っている。名古屋市長や愛知県知事を巻き込み、若い力で地域を考えるキッカケを想像することを目標に活動している。

- ・自己紹介
- ・名古屋わかもの会議とは
- ・今までの活動
- ・これから(第二回わかもの会議)について

## 2. ディスカッション

### ①「高校生×ESD～私たち高校生は友達に ESD を伝えられるのか!？」

ファシリテーター：稲熊亮さん、中村鈴菜さん

最初に「マンガラート」というゲームを行い、参加者の ESD に対する理解、認識を確認した。その後、自分たちが ESD にどのように関わっているか、あるいは身の回りではどのようなことを行っているか、行っていないか等現状について意見を出した。その次に、自分たちが ESD をどうしたいか、どうなってほしいかというテーマで意見を出し合った。高校生らしく、色々な方向に話が弾み、ESD について多様な意見がでた。高校生はそれぞれバックグラウンドが違い、今後の活動も異なる。しかし、それぞれのバラバラな意見をみんなで共有して今後の活動に活かしたい。「ESD をこうしたい」という高校生の生声を抽出した。多様すぎる意見をいかに共有し、活動に活かしていくかを考えていく。

### 【ワークショップ① ESD について思いつくことは？】

[ESD 初心者]

- ESD ってなに？！
- ESD はよく分からない
- ESD をもっと分かりやすく伝えて！
- 学校で ESD がどうのっていわれても実際に何をするかわかりません。

[ESD 実践者]

#### ■ プラスの思い（やってよかった点）

- 文化交流たのしい
- 世界の問題を知る
- もっと国際交流したい
- ぼじていぶしんきんぐ
- 他の団体との協力したらいいことできてー

#### ■ マイナスの思い(改善したい点・自分の反省)

- とりあえず動きたい
- えいごが必要。国際交流とか。
- もっと話し合おう！！
- ESD にかかわっててもよくわからない
- 勉強ばかりしていないで環境とか世界とか学べれば。国際交流良いなあ

[これからの活動に求めるもの]

- ヨコの高校生のつながりもっと！！
- 社会全体も問題じゃない？
- 体験することをもっと多く！ディスカッションも含めて！
- 学校主体での取組みをもっと増やす。ユネスコスクール以外でも
- 交流は多いけれど環境と接することが少ない
- 若者と大人の交流の機会が欲しい
- 大人もホントに理解している？
- 大人が抑制している
- 行政にもっと若者の意見を取り入れて欲しい
- ワカモノの意見聞いてよ！！

### 【ワークショップ② そして友達に伝える時のキーワードは？】

[課題]

- アバウトすぎる
- 広すぎ

- ポスターとかをはっていても何のことだかよく分からない
- けっきょくあんまり普及しない
- ESD にもっと興味をもってもらいたい

#### [解決策]

- 興味が出る名前を(日本語)
- わかりやすく!
- もっとくわしく
- 日本語も大切
- 発表する機会を増やす
- みんなにもっと ESD の大切さをわかってもらうべき。
- テーマでなく実際の活動を知ってもらう
- わたしの愛用しているバッジ
- ESD の広告とか作ったらどうですか。パッと目に入るような。
- 日本のことをもっと知ってもらう。
- 浸透させるには学校が大切
- 多くの学校での普及を
- 授業でもっと扱ってほしい。
- 多くの学校での普及を
- 日本の文化をもっと知る
- 大人と子供を交えての話し合い!
- 多宗教国家をみならうべし
- 関心を持てればもっと知ろうと思える。

#### [キャッチフレーズ]

- 継続
- 色んな事が ESD !
- E えっ!! S そんなこと D できるの?!
- E えっ? S そんなこと D できるんだ!
- 実行
- 交流も大切
- 交流はとても大切!!
- Education
- for
- sustainable
- Development
- 生物多様性
- つながってる!
- ESD ってスバラシイ!
- アメフラシ愛してる♡
- 日本と世界
- 不満
- 豊かな未来を
- Future

## ②「大学生×ESD～夢しゃべり場」

ファシリテーター：中島萌子、水野陽介

参加者の夢をテーマに語り合った。こんな生活をしたい、今の活動をこんなふう to 展開させたい、もっとこんなふう to 大学生生活を充実させたいといった夢があがった。その後、ESD が大切にしている視点を共有するために、里山や野生生物

の写真を提供したり、参加者の活動内容を共有する時間を持ち、それぞれの夢に ESD の視点を加えるとどのように変化するか等話し合った。ESD の視点を加える前と、加えた後と比較すると、自分がどう在りたいかという視点がとても強かった夢が、他人とどう関わっていくか、こんな未来と一緒に作っていききたい、などの視点に変化した。参加者同士、その違いをお互いに関心を持てることができた。

大学生の夢や将来像に「ESD」の視点を加えると、考え方、モノの見方に変化が生まれる。その夢を実現するために実際に行動することが持続可能な社会につながる。

### 【将来の夢の変化】

最初の夢	ESD の視点を加えた夢
小説家になりたい	企業の CSR 活動を支援する。ドラマチックなストーリーに。
在学中に海外旅行する	下調べ。世界遺産のこととか、美しい自然を見ることでビジョンを持つ
一軒家に住む!!(田舎に)	一軒家・・・家具は国産・地域の集まりに参加
表現活動を通して人も笑い自分も笑い・・・心が喜ぶことをしていきたいです。	たくさんの人と積極的に出会い、様々な考え方を吸収していきたい。出会った子どもたちに“自分も大切に”想う気持ち、人も大切に想う気持ちを伝えたい、考え合い、成長していきたい。
ニュージーランドにすむ。移住。	人とのつながりを大切に。自然と共にくらす。
自分がしていることに誇りを持っている	自分も周りも巻き込んでエンジョイ!

### ③「地域×ESD～地域が ESD をつくる?!」

#### ファシリテーター：水野翔太さん

「そもそも ESD とはなんだろう」をテーマに話し合いを行った。一人一人視点が違い、それぞれが思う「ESD」について共有した。そして、「ESD が地域や自分の生活にどう関わっていくか」という点に絞り話を進めた。本来答えを出すべき問いではないが、ESD により「人と人とのつながり」「地元愛」が形成されるという話になった。人と人とのつながりをつくるための種まき、つまり、小学校等教育現場で ESD を実践することが必要だ、という意見であった。次に、情報を発信していくこと、発信するにも一方的に提供するのではなく、お互いに深め合い、分かち合うことで関係性がつながっていくのではないかという意見がでた。共感性を大切にしながら、地元愛を育むことの重要性を確認した。

ESD は人と人とのつながりを生み出し、共感性を育みながら地元愛を形成する。小学生からの教育が重要である。また、一方通行の情報提供ではなく、深め合い分かち合うことのできる情報交流、関係性づくりが重要である。

### 【ワークショップ① ESD ってなんだろう?】

- 環境保全
- 持続可能な社会
- 啓発活動
- 種まき活動
- 環境教育
- 教育者教育
- 多くのテーマがある(環境、まちづくり、防災...etc)
- 生きる力
- 国際的

- 全てがつながっている。その名称
- 考えて行動していく力
- 今後のことを考えるもの(昔と今を比較)
- 分野がたくさん
- 継続
- 人と人とのつながり
- 考えること 自分-時間歴史-周囲環境
- 行動すること
- 他者と関わること
- 教育に関するもの
- 持続可能かを考えること
- 生きることについて考える。

### 【ワークショップ② ESD が地域や自分の生活にどう関わっているか】

#### [地域と ESD の関わり]

- 可能性を開拓させる場所
- 自分らしさを出せる場所
- それぞれが答えを見つける場所
- 地域との協働
- 社会と地域の活動を合せる
- みんながいきいきと生活できる

#### [自分の生活と ESD の関わり]

- 持続可能な社会向けたリーダーシップ
- 今ある活動を続けていく
- 地域を盛り上げる
- 発信
- 問題に関心を向けること

### ④分科会まとめ

#### [課題]

- 大学生（ESD に関わっている大学生が地域を盛り上げる。地域を使って情報発信する）
- 情報発信で終わってしまう。（成果の実感ができないから？継続が必要？効果的な発信方法ってなんだろう？）
- ターゲットが絞り切れていない（地域にはいろんな人が生活している。ESD な情報発信をするには、まずターゲットを絞り着実に浸透させていく）
- どう地域協働をしていくか

#### [解決策]

##### ■情報発信に関して

- 種をうる教育現場でやってみる→人と人とのつながり×地元愛→情報発信→人を集める（大学生が教育現場（小学校とか）で情報発信をし、地域の問題を考える機会をつくる。地元に対する愛着を活かし、人から人へ情報発信、同じ思いを持つ人を地域で増やす。）

- SNS、口で説明するのが一番、イベントとか地道にコツコツと。相手を知らないと伝えられない。
- 県とか市が持っているものの情報発信 & 情報をくみとる
- 自分が勉強していることを切り口にする。
- 場をつくる。報道を通す。

：①行政からの地域情報、②自分の経験、③勉強したことを

：①イベントで相手(地域の方)に直接、②報道、③教育現場で発信する

#### ■ 地域に関して

- 愛知はつながりが強い。それを強みにしていく。周りの人の共感。
- お互いを深め合う。分かりあうことはできているのか？ → つながっていく
- コミュニティとかを切り口。
- 企業が強い。どう折り合っていくのか。
- チームではたらく
- スポーツ、農業、ボトムアップ

#### 【コメンテーターからのメッセージ】

- フォーマルな教育現場からインフォーマル等、すべてあらゆる面で様々な意見が出せる。今やっている子たちと、やっていない子たちがいることが特に良い。それがどんどん広がって繋がっていくのが ESD の一つの形である。
- 夢に ESD をプラスするというユニークな発想が、今後 ESD を広める方法になるかもしれない。
- 地元を愛して、そこから繋がって広がって地域づくりをするのが ESD の一つの形である。
- 行政は地域とのつながりを持つことや地域の魅力を発信することが仕事である。いろいろな地域の方々と連携してさらに進めていくことも大事である。
- 高校生はまだ社会に出て行動が難しいが、大学生は考えたことを行動に移せる時期である。思い描いた夢を実現できる土壌を大人は作らないといけない。
- 「答えを出さない」とあったが、実は ESD には答えはない。だから一つじゃない、たくさんの答えを出さずに、自分たちができることをやっていけばいい。
- 「忘れない・伝えることが大切だ」ということこそが学び合いの出発点である。
- 自分の人生でやってきたことを子どもに伝えることから教育は始まった。知恵を伝えていくことはみんなができる。
- 行政や政治を巻き込み、自己満足ではなく自分たちがコミットしていくことが重要である。
- 「ESD」は合言葉である。世界中の人にも通じる合言葉として使えばいいのではないか。
- 一つだけ意識してほしいのが、「自分たちは社会をつくっている」ということ。今日発表したことは、大人である私たちに影響を与えているという相互関係。こういう相互関係をつくるのが社会をつくっていくということだ。
- 専門家をどんどん地域にひっぱりこんでほしい。専門家が正しいとは限らないが、真剣に先端の科学や学問を研究している。それが正しいか間違っているのか両方の意見を聞くことから議論が生まれ、それぞれが判断し、行動を選択する力を地域の人々がもつ事が大事。
- 今の思いや志を、ぜひ将来の自分の仕事、職業にしてほしい。そうでなければ、もったいない。
- 世の中を変える3つの者は「よそ者」「ばか者」「若者」である。若者の力は世の中を変えていく可能性がある、小さいけど大きな力だということを信じて ESD 活動を進めていってほしい。



## 第2分科会「ESD（答えのない）授業をつくる～学校でいかに展開するか



(教員+EPO 中部企画・運営)

参加者 32 名 ゲスト 5 名 スタッフ 2 名 合計 37 名

ESD 授業を実践している教員等をゲストに、学校でどのような授業を展開しているか、どういったことに留意して実施しているか、地域とどのように連携しているか、など ESD 授業づくりの「キモ」を共有しながら、地域での ESD 授業づくりや実践方法を体験し、2014 年以降、「実施すべき ESD 授業」について意見交換をします。

### ●コメンテーター

中村絵乃さん（特定非営利活動法人開発教育協会事務局長）

村上千里さん（認定 NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議事務局長）

### 【実施プログラム】

1. 対談「答えのない授業」とは 前野伸夫さん（元小学校校長）
2. ESD 授業紹介  
内田裕斗さん（岡崎市立梅園小学校教諭）  
中村羊大さん（愛知県立豊田東高等学校教諭）
3. ESD 授業実践  
内田裕斗さん（岡崎市立梅園小学校教諭）
4. グループセッション及び共有  
「今後の授業づくりに必要なこと～「答えのない授業（ESD 授業）」実践を体験して」

### 【対談より】

#### 1. なぜ今「答えのない授業が必要か」

(1) 学校教育の側面として、「授業改善」が重要である。

子どもたちに「まかせの瞬間」を見つけ授業を組み立てることが必要である。これは授業改善のヒントである。まずは①傾聴、②場面をつくる、いわゆる仕掛け、③意欲、私はこうしたいという意欲を育むことが大切である。子どもたち同志が、聞き合い、同じことと違うことを認識し、話し合い、新しい方法を考え、私はこうしたい、と言えることが重要である。そういった場面をつくり、場面を活かす、授業のデザインスキルを教員は備えたほうがよい。子どもが「知（識）」をどう身につけていくか、話し合い、関わり合うプロセスをつくること、また課題設定が重要である。

(2) 社会的側面として、「学校を中心に地域再生」をすることが重要である。

学校も色々な問題を抱えている。子どもの集団生活、教員や学校の指導法、地域コミュニティが弱い等、子どもを取り巻く環境に問題がある。持続不可能な問題に、子どもたちは学校の外に出たら出会ってしまう。だからこそ、生き抜く力、ESD が必要である。地域に存在する子どもを取り巻く課題を学校が中心になって解決していくことが求められる。子どもたちは疎外感を持ちがちである。①自分のよさ：自分にはこんな素敵なところがある、と感じられること、②学校生活のよさ：学校って楽しいな、早く明日にならないかなって思えること、③地域のよさ：この町に生まれてよかったなと思えること、を子どもに提供していくことが大切である。

(3) ESD の原点は「道徳教育」である（誤解を生むかもしれない）。

道徳の時間は学校の教育活動全体を通じて行われる。道徳的な価値の自覚と自己の生き方について考えを深め、道徳的実践力を育成する。

①自分と社会、②自分と自然、③自分自身と他者との関わり、自然や崇高なものへの関わり、集団と自分の関わり  
との中で、モラルを育てていく。

(4) ESD は人権教育である。

人権教育は、自己肯定感を育み、他者との関わりの中で自分がどう生きるかを学んでいくものである。教科にして評価をするものではない。人間教育そのものである。子どもたちが色々な体験や出会いの中から見つけていく、気づいていく、そこから生き抜ける力を養っていく。

(5) 答えのない授業の特徴

- ①心に火をつける（火種が答えのない授業）
- ②つながる実践（人権教育）
- ③子どもたちに「まかせる」活動
- ④教師（担任・学年）に「まかせる」活動
- ⑤教師の手立て「ゆさぶり（仕掛け）」

### 【授業実践の紹介より】

#### ●内田裕斗さん（岡崎市立梅園小学校教諭）

[支援するという一方通行ではなく、双方向の対等な関係をつくる]

防災教育において、被災者に対して何かをしてあげるといって授業を行ってきたが、そうではなく、自分たちにできること、考えたことを被災者の方に届け、一緒に学び合う、気づき合う授業をつくるのが ESD である。

#### ●中村羊大さん（愛知県立豊田東高等学校教諭）

[答えのない授業に大切なこと]

対話型授業と地域に根ざした活動であること。そして、大切にすべき 3 点が、①誰かが言ったことを否定しない、②誰かが（一人で）仕切らない、③答え（結論）を出さない（結論を出すことが目的ではない）、である。現状で主にされている教育の目標、「いかに速く、“正しい”答えを出すか」といった力の育成とは真逆である。このことにより、たくましく生きていく力、乗り越えるためのたゆまない意欲と態度が育まれる。それが「持続可能な未来をつくる力」である。

### 【今後の授業づくりに必要なこと～「答えのない授業（ESD 授業）」実践を体験して】

#### 1. 実施した授業内容

題材「72 時間生き延びるのに、持っていきべきものは何だろう」

対象：小学校 6 年生 1 クラス

授業時間：45 分 総合学習の時間

内容：72 時間生きるために持っていきべきもの（水、毛布、ジャケット、エビピラフ、トランプ、懐中電灯、ラジオ、絵本、カンパン、塩、防災用のポンチョなど）を用意し、何を持っていか話しあう。

#### 2. 参加者の気づきと学び

【授業内容について】

- 支援する側される側ではなく対等な関係としてどう行動できるかを考えたのがよい。
- 地域の人々の存在が必要だと子どもたちが思えるような授業にする。
- サバイバル状況を想定して実施した方がよいのではないか。
- 持っていきものを明確にして議論するのもよいのではないか。

- 自宅から必要なものを持っていくという想定で家庭学習を交えての反転学習もよいのではないか。
- 避難所のイメージが湧いてこない。想像するための映像や写真があってもよい。
- 私はこれを持っていくという分担を相談するのもよいのではないか。
- 先生と生徒との対立が強い。とりまわしている。
- 各グループで試行、議論する時間が足りない。
- 模範解答を誘導しようとしていた。水の否定。
- 前提条件の議論、プロセスを話すべきで、結論、何を持っていくべきかを急ぎすぎた。
- 結局どうさせたかったのかわからない。避難所のイメージが必要。具体的でない考察は子どもには無理。
- 道筋（誘導ではなく）拡がりの方向性が見えない。
- ラジオは一つでいいよねとか、皆違うものを持っていくとよいか、話が深まるとよかった。
- 時間が足りなかったのが残念です。時間があれば・・・
- 水のペットボトルも実際に触らせ、持たせる、ポンチョを着せる等できるのでしょうか。
- 持っていきたいところに引っ張られてはだめ。
- 避難所というキーワードを拾って欲しかった。そこから広がる議論がきっとあったと思うから。
- 非常用袋が日常用袋に変わっていったのも、どんな場合でも活用できる袋に議論を通じて進んでいったのでしょうか。
- ほかの選択肢もあると良かった。考えを柔軟にできるように。
- 「答えのない」→「一つではない」その先のことを考えさせる。時には、「エビピラフ」というときも。
- 一つ一つがどんなときに必要かを考えると良いのでは？
- 普段着目しないところに着目。
- 発問の時に考える。
- 防災教育にリアルさが足りない。
- 地域に必要な人であるということを感じられるように。
- 「持っていくべきもの」より、「必要なもの」とした方が誘導尋問のようにならない気がします。
- 机に並べてある品物以外にもどんなものが考えられるか、出させるとおもしろいのでは。工夫の余地をつくる。
- 今日の非常袋に入れる3つの中で、内田先生が入れておきたいものも入れておくと良かったと思います。また1lのペットボトルや250mlのペットボトルを両方入れておくとよいと思います。

### [今後の授業づくりに必要なこと]

- 答えのない思考について  
「答えのある問い」はほとんどない→自然な話し合いが大切。  
しかし、答えを限定しているのは教員→まとめないと授業にならないから→まとめは必要（何かしらの成果）→まとめる力、話し合う力（人間性含む）。
- 大切！ 大変な状況の学校で始める時の大変さ、工夫を知りたいと思いました。
- 設定を分かりやすく、ねらいをもっていくしかけが必要。どれだけ誘導して良いのかむずかしい。
- 批判的思考：ほんと？ どう思う？ ができるように。
- 子どもたちの心にどう火をつけるのか？ 火のつけ方：課題を学校の中で議論してほしい。
- 答えのないという意味は、答えが一つではないということで生徒たちに多様な答えをあえて考えさせ、その数ある答えを（可能性）共有させる機会を与えることかなと、本日の授業を受けて感じました。発問の仕方、教師側のファシリテーションが勉強、経験のポイントですね。

- ねらいはあるが、1つの答えは用意しない（ついつい教師の思う答えに結びつけてたくなる・・・）。これから自分も常に学ぶこと。アンテナを高くすること（今、どんどん変化していく）。
- 答えはないが、重視する価値や視点、考えてほしいことはあるはず。
- 答えのない授業とは、自分の考えを創り出し、自己を確立するための授業と思いました。
- 自分自身を見つめさせる。黙想の時間をつくる。
- 答えのない→○プロセス ×アンサー
- 授業で答えは出ないが、そのプロセスが大切だということが分かりました。ESDの授業は工夫1つでどんどん子どもたちの為になっていくのだということを学ぶことができました。

### 3. 授業実施教員へのメッセージ

- 答えのない授業は本当にむずかしい。先生の思うようにやろうとしない。ひっちゃかめっちゃかになりますが、3年続けたらうまくもっていけるようになります。
- ぜひ、学校の外へ出てください、つきあいも含めて。
- 短い時間での授業ありがとうございました。すぐに持ち出せる、あるいは取りに行く時間がない、持ち出し袋が流されてしまう、常に携帯する袋が必要、といった部分の誘導は先生の方からはっきりしていただくと思考がそちらに向けられたと思います。
- 話し合う際にある程度の設定がないと話にくいのかなと思いました。ただ、前提条件がないと逆に自由な考えが入ってくるのかも。
- プレゼンテーションが優秀！愛知県の先生方のレベルの高さを知りました。
- すばらしい。
- 初めてのチャレンジ、よくがんばられた。
- 子どもたちが考えて出した結果を被災地の子どもたちに報告して、アドバイスをもらうのはとてもいいアイデアだと思います！
- たくさんのシチュエーションを設ければいいと思います。
- お互いがんばっていきましょう！お疲れ様でした。
- 教師が悩み、努力する姿は、子どもにも伝わる（と信じています）。子どもとともに、学んでいけたらすてきですね。
- 子ども達と楽しい授業をされているんだろうなと思いました。「してあげる」ではなく、自分たちだったら、という共感的な視点を持つための取組は良いと思います。より、子どもにまかせるために情報提供、組み立てなど、工夫は必要かとおもいます。応援しています。
- 内田先生の考えは考えとしてしっかり持つことは必要と思います。良き教師は良き学生である。（対話がこれからのポイントです！！）
- 内田先生、がんばれ・・・?? あんまり頑張らなくていいけど、今のままで。社会教育の立場から言うと、学校ばかりが現場ではない！と声を大にして。あれでもよし、これでもよし、大らかな心で学習してくれる教員がいっぱいいれば、みんな違ってみんないい・・・って世界になるんだろうな。答えは、自分が死ぬとき、また、死んだあとわかるんじゃないの?!という感覚で生きています。
- とってもおもしろい授業でした。こういうところで授業されてすごいです！！
- このような場での授業提案ありがとうございました。
- 模擬授業をありがとうございました。先生のように子どもたちが主体の授業を将来できるように目指していきたいと思いました。

#### 4. ゲストからのメッセージ

##### ● 中村絵乃さん

「やってあげようではない事をしよう」というのが素晴らしい。震災の支援や募金をして終わりというのではなく、自分達もそのような状況になることもある、当事者として共感して何かしようと考えるところが素晴らしい。子どもにもっと任せようするには、最終的には避難袋を作ることを目標として、そのプロセスの中で子ども達から出てくるような方法が良いと思う。先生側には子どもから出ないものも持っていなければならないので、準備は必要になってくる。「答えはない」が、先生としては何を考えてほしいか、どんな価値が重要かというのは絶対にある。それを軸にして授業を作らないと、何でも良いになってしまうことが懸念される。

開発教育の視点では、「される側になってみる」という方法がある。援助する、物をあげるという事は当然良いこととして、いろいろな学校が被災地や途上国にたくさんの品物を送っている。「でも、本当にそうですか？」というところから考える。自分が持っている価値観は当然他の国、他の地域、隣の人とも違うということに気づき、それを押し付けていることに気付くことが必要。そういう根本的なところをきちんと押さえられると良いと思う。

##### ● 中村羊大さん

最初に 72 時間、非常用袋に入れるもの 3 つと限定的にしすぎて、そこから広がりを持たせるような議論を求めるのは難しい。何でも良いというスタンスが大事。出てきた意見に対して「水って本当に大切かな？」と先生が言うのではなく、生徒同士、クリティカルシンキングで発言が出てくるような仕掛けが必要。「それも良いけど、もっと良い道はないか？」、「もっと良いものはないか？」という発展的なところがあると、避難袋よりは、もっとこっちの方が良いのではないかという発想になるのではないかと思う。もし高校で取り入れるのであれば、自宅に課題を持ち帰らせて、家の避難袋の写真を撮る。それを持ち寄り、授業を行う。実際に避難袋を準備されている家庭もそうではない家庭もある。より「現実」に引き寄せられるので、高校であればそこまでやりたい。

##### ● 山内貴弘さん

実際に学校では子ども達の発達段階と学びの傾向性があるので、ここまでの情報が入っている等、子どもはステージにある程度乗っている。今日の参加者はそれぞれ差があり、同じステージに乗ってはいない。その中での一つのシミュレーションであっても何かを出していくのは難しい。ただ、教員は ESD を大事にしているので、日本人が一番不得意としている批判的思考、人の揚げ足を取るといった批判ではなく、「それ本当？」という本質を見抜くことが大事である。教師の一つの手立てとして、「本当？」「それどう思う？」というところを取り入れていくとできていくのではないか。

##### ● 前野伸夫さん

子ども達の心に火を点けるには、いろいろな点け方のパターンがあると分かった。今回の内田先生の場合では、様々な課題があることも見えてきたので、この課題をできれば学校の中で議論してほしい。これが ESD を広げる基になると思う。自分は管理職であったので、職員にこれをやれとは言わなかったが、ESD のノウハウは、こんな事もあんな事もできるといういろいろな形で伝えた。そういった学校の中での議論がなされないと続かない。本当に続けていくのであれば、学校と、NPO 等の各種団体と協働して、みんなで話し合う機会を持ちながら、力を合わせて進めていけると良いと感じた。

#### 5. 参加者の感想

- 若手を育てる、これこそ教員の ESD。
- 答えはないけどねらいはあるゾ。
- おとなが大人を育てる場面を初めてみた。教員同士ではない感じが刺激的だった。ラスト 20 分は参加型の理想形

だった。学校とそれを取り巻く社会とが繋がった感があった。新しい感覚。教育委員会がこのような研修を企画しないといけない。ESD の本質の領域に迫ってきた。自己肯定感、世代間倫理、21 世紀型能力、新学力観まで理論が構築できてきた。ESD は子どもと大人の本気が見られないといけない。

- 学校で ESD を行うための視点をいくつかつかめました。先生方が子どもたちにどんな力をつけたくて授業を進めていくのかを知り、とても参考になりました。

- 答えのない授業、なぜそれぞれがそう考え、人とのちがいの中で、それが正しい、自分が正しい、様々な価値を見いだせるのかと思います。

- なんでも学習する判断力を養う。

- この場所がまさに ESD だった。

- 内田先生の授業に参加して、やっぱりネガティブな参加態度はこんな授業になっていくのだなーと思った。私は 3.11 以後、4 月から 20 回ほど、ボランティアに行き、本校で避難所の準備をしています。もっと体験しないと世界へ日本の代表として…

- 学校でこれだけが取り組まれていくことはスバラシイ！！その分、生徒はいずれ社会へ出るのだから、こうした授業が活かされる社会、地域を築くことが大切だと思った。そのために地域、企業も学校に入って共に ESD を！

- 「何がねらいなの？」という疑問には、笑ってしまったけど、皆、答えがある方が安心なんだね。

- この分科会、とっても良かったです。36 年間、幼稚園教諭をしてきて、子どもが主体の保育の大切さをひしひしと感じていますので、1 時間 30 分の組み立て方、登場された方々の話の内容、最後の授業もとても良いアイデア、来て良かったです。感謝。

- 答えのない授業、勉強になりました。ESD を少しでも取り入れて、未来に継続したいと思います。

- 答えのない授業の提案について、ESD と道徳（倫理）との、つながり、重要性を再認識できた。

- ESD の授業がどのようなものか興味があり、参加させていただきました。

- 自身の気持ちを社会に投影させるために…ツイッター？フェイスブック？ではなく日本や地域としてのコミュニティを。

- 子ども同士が学び合う、考える、多様な視点で枠を超える、継続的な学び、変化、変革を目指す。

- 地域の人たちと交流する授業。

- 体験が大事。

- 再生した学校（その時、中心にいた）が最近、学校が荒れだした（まとめない授業をする若い先生がふえてきたため。）その解決を探しにきました。

【自分にできること】

- 現在は環境の出前講座を進めています。小、中学生に名古屋 ESD 会議が 11 月 10～12 の成功するための応援活動をしています。

- 今できること = 勉強。

- 特に名古屋 NGO センターとして、国際協力、地域づくり、防災、平和、人権に取り組む NGO の現地を紹介することができるので、そのためのコーディネートをさせてもらえるなら嬉しい。また、そのために精進したい。

- 企業と学校の連携 → 自社で地元の学校向けにオフィス社会見学をやっています。（お手伝いですが）

- 学校と企業や NPO のパイプ役？ ESD のお話？

### 第3分科会「ESD、なごや環境大学の担う役割」（なごや環境大学企画・運営）

参加者 25名    ゲスト 9名    スタッフ 4名    合計 38名

なごや環境大学を舞台に活躍する人々を話題提供者としてお迎えし、なぜなごや環境大学を舞台にするのか、どんな波及効果が現れたのかをお聞きし、今後この地域でどのように ESD を促進していくのか、なごや環境大学のしきみを使うことによりどんな可能性があるのかを、フロアー参加者を交えてそれぞれの立場からの意見出しを行います。なごや環境大学に関わるひと、なごや環境大学ってなあに？？と思うひとぜひあなたの声をお聞かせください。

#### ●ファシリテーター

千頭 聡さん（なごや環境大学実行委員常任幹事）

松本イズミさん（なごや環境大学実行委員）

#### 【実施プログラム】

##### 1. プレゼンテーション

(1)ESD カフェを企画・実施して なごや環境サポーターネットワーク 牧 宏さん

(2)共育講座を企画・実施して 環境カウンセラー 岡本明子さん

(3)共育ゼミナールを企画・実施して 山崎川グリーンマップ 大矢美紀さん

(4)なごや環境大学に参加して なごや環境大学受講生代表 今村結芽さん、駿斗くん、誠二さん、治子さん

(5)なごや環境大学と ESD なごや環境大学実行委員常任幹事 千頭 聡さん

##### 2. ワークショップ「なごや環境大学のこれまでとこれから」

#### 【プレゼンテーションからのメッセージ】

##### (1)ESD カフェを企画実施して なごや環境サポーターネットワーク 牧 宏さん

[なごや環境大学のしきみの活用]

①ESD テーマ枠「ESD 講座」「ESD とこども」「ESD と文化」「ESD と交流」を活用

ESD 講座—自然エネルギーを通して持続可能な社会を考える。(3回講座) 2012 年度前期

ESD カフェ—子ども・大人・地域をむすぶ。(5回講座) 2013 年度後期

ESD カフェ—学校(園)・行政・市民の連携による教育文化都市の創造(1回講座)2014 前期

ESD カフェ—持続可能 な社会・地域を生きるために(都市と農山村をむすぶ) 1回講座 2014 年後期(予定)

→ESD カフェは、2013 年 10 月から月 1 回程度、20 人前後の会合であったが、ESD の普及・啓発に役立った。

[今後、ESD を進めるために]

①名古屋市環境活動推進課の環境サポーターとしての活動

： 幼保小中学校への環境学習・活動の出前授業の継続

②学校(園)の ESD 学習への相談、サポート

： 学校(園)のカリキュラム作成の相談、学習活動の提案、資料提供等

●2014ESD モデルプログラム(環境省)20 に選定されたプログラム (これからのエネルギー生活を考えよう—電気に頼りすぎた生活を見直そう)の活用

●現在作成中である環境学習プログラム実践集の活用

③学校と地域の連携のための、ESD コーディネーター的な役割を果たす。

④ESD についての普及・啓発活動、研修を行う。

## (2)共育講座企画・実施者として 環境カウンセラー 岡本明子さん

[実施した講座事例]

ESD は幅広い概念であり、多くのテーマに応用可能であることや、異分野（環境・農林水産業・産業）の融合が必要であることを念頭に、持続可能な利用・地域おこしや、具体的に身近なモノから連想した、ESD を意識した講座を実施している。

- 社会見学型講座 環境カウンセラーと行く シリーズを展開
  - 社会教育施設の利用法（2005 年）
  - エネルギー（2012 年）
  - 木（2010 年）
  - 地域ブランド（2012 年）
  - セントレア（2014 年）など

[なごや環境大学への提案]

- 関係者の交流会
- 参加者の交流会・情報交換ツールの提供
- 市民との連携の促進

[恩返し・・・私に出来ること]

- 施設・研究所・企業などの見せ方・伝え方の提案
- 関係者の環を広げること
- 見学・視察先の提案

## (3)共育ゼミナールを企画・実施して 山崎川グリーンマップ 大矢美紀さん

①山崎川の昔の様子聞き取り調査活動

2009 年より子どもたちが元・川ガキだった地域のお年寄りを訪ね、山崎川の昔の様子やこの川から消えていった生き物の聞き取り調査を行っている。

②山崎川今・昔フォーラム開催(2013 年 4 月 24 日)

③講座「山崎川石川橋で採取したトゲナベブタムシ標本から見えてくるもの」(2013 年 12 月 26 日)

## (4)なごや環境大学に参加して 今村結芽 今村駿斗 今村誠二 今村治子

●ぼくたち、わたしたちの学校 なごや環境大学

●わたしたちにとって ESD とは？

E いい日には

S せっかくだから

D でかけよう 自然の空気はおいしいな

E いい環境

S 過ごしやすいな

D 動物も地球で楽しく生きている



## **(5)なごや環境大学とESD なごや環境大学実行委員会常任幹事 千頭 聡氏**

[なごや環境大学の到達点と今後の方向性—ESDの視点から—座]

- (1)協働のしくみとその発展—持ち寄りを持ち帰り
  - (2)自覚的・主体的な市民への学び合いと育ちあい
  - (3)市民活動団体・企業・行政・大学のSDへの参画
  - (4)都市全体を、SDへの実証的な空間に
  - (5)持続可能性への多様なアプローチを可能にする
- 持続可能な都市なごやの実現に責任を持ち、行動できる市民づくり

### **【ワークショップ「なごや環境大学を使って、ESD・環境教育（学習）をどう進めていくか」**

#### **【グループ①なごや環境大学にやってほしいこと】**

環境問題は地球規模で考えると大きな問題であるが、まずは自分に何ができるか、何が大事かを考えていききっかけづくり、バックアップを環境大学に担ってもらいたい。環境に興味を持っていない人、子どもも大人も環境に興味を持ってもらう機会を環境大学でつくってほしい。学校等に社会で学べること、環境に触れる機会は少ないので、体験学習型に触れる機会をもっと作ってほしい。地域で活動している団体がまだまだあるので、もっとPRし、地域で活動している団体ともっとコラボをしてやってほしい。

〈模造紙〉

- 地球規模（大きな問題）～身近な事
- 自分ができること
- 何が大事かを考えていくこと←バックアップを
- 学校で学べないこと←触れる機会をつくって欲しい
- 地域で活動している団体がまだまだいる←もっとPRを
- 子どもから大人まで環境に興味をもってもらう機会を

#### **【グループ②なごや環境大学！】**

なごや環境大学を通して、地域とその地域外の人でも参加できる、また発信をしていく場としてESDにつなげていくことができる。情報を発信し、みんなが参加してやっていったらどうか。体験ができる、聞くだけでなく、参加し、いろいろな事を知るといい形が良い。

〈模造紙〉

- ★地域みんなで参加する参加しやすい講座が基本
- ★新メンバーを取り入れる
- ★学習のつなぎ、情報発信
- しくみを知って利用
- 親が興味を持つ講座
- 難しそうな講座にもチャレンジ
- 本物を見る体験をしたい
- 負担金の継続（感謝）
- 若い人が参加できる。ファミリーOK
- いろいろなところを見たい

- 関心がある方を集める（宣伝しなくても伝わる）
- コーディネートの役目を作ってみたらどうか
- 発信

### [グループ③]

このグループは環境サポーターが大半で、企業、今回初めて知って参加された方がいる。企業側として環境大学は市民に自分たちの活動を伝える良い場である。自分たちの活動と環境大学の活動の連携が上手くいっていない。子どもたち、学校とどのように連携、どうつなげていったら良いかが今後の課題。環境大学は「つながり」「協力」ができる場である。  
〈模造紙〉

- 参加→楽しむ→講座を持つ。すごいところ
- 日本の文化を伝える（芸、環境） Ex:お米と和紙
- 環境サポーターみかんの会。忙しくて行けないけど続けてほしい。
- 子どもたちに PR、学校との連携→自分たちのプログラムと環境大学と結び付けられるといいな（どうやったら・・・）
- いろいろな関わり方がある。→どうやってつくる？
- 関わり方はいろいろ
- 大学→プラットフォーム
- 人を育てることは時間がかかる→ずっと続いて
- いびがわ町中がキャンパス
- 学びの会
- 伝統野菜→健康長寿
- あそび⇒学び（ESD・環境）
- 家族で参加→いいね！！
- 孫を連れて参加したい
- 関わっていない地域の人たちに広がっていくといいな
- 意識が変わってほしい、長い時間がかかる
- 登録すると、一般の人に伝わる。
- 知らない人は知らないまま入口になるおもしろいこと、みんなで学んでいく←考える
- 企業
- 幅広く市民に伝えるには、とても良い
- 市民・環境大学という信頼
- つながり・協力ができる場所→体験の場をつくるとよい

## 第4分科会「ESD推進の開催地モデルを考えよう！」(中部ESD拠点企画・運営)

参加者9名 ゲスト3名 スタッフ4名 合計16名



今年2014年11月10～12日、名古屋国際会議場でESDユネスコ世界会議が開催されます。2007年から東海・中部地域でESDのネットワークづくりを続けてきた中部ESD拠点(RCE Chubu)は、これまでの成果を踏まえて、ESD推進の「中部モデル」を構築しています。ESDユネスコ世界会議を機に、この開催地モデルを発信して、さらなる国際的なESDの検討・発展が進むことをめざしています。ぜひ一緒に考えていきましょう。

### ●ファシリテーター

古澤礼太さん(中部ESD拠点協議会事務局長)

浅田益章さん(中部ESD拠点協議会運営委員)

### 【実施プログラム】

1.趣旨説明 古澤礼太さん

2.話題提供

武者小路公秀さん(中部ESD拠点の運営委員)

武藤一郎さん(中部ESD拠点の運営委員)

浅田益章さん(中部ESD拠点の運営委員)

3.ワールドカフェ方式：テーマ「開催地モデルを考えよう！」

ラウンド1,2,3を終えてのまとめ発表

### 【実施内容】

1. 趣旨説明 古澤礼太さん(中部ESD拠点協議会事務居校長)

「ESDユネスコ世界会議」の概要

ESDの国際的な地域間連携の取組み

ESDを推進する「中部モデル」の紹介趣旨説明

2. 話題提供

(1)武者小路公秀さん(中部ESD拠点の運営委員)

ESD世界会議の審議内容と新自由主義グローバル基準に対して、自然と文化一体のコミュニティを重視することで対抗。そこで、中部モデルを考える。上・中・下流の分断と格差がなくなると、地球規模の分断と格差の解消もなくなる。「つくる」という営みが重要である。自然と溶け合った再生産を流域圏で行う。問題提起：中部の伝統的な知恵を積み上げてきた。水の循環のなかで一緒に生きてきた。そのことを学び直し、自然と文化一体のコミュニティづくりを行う。

(2)武藤一郎さん(中部ESD拠点の運営委員)

ESDとはもともと世界の開発に伴う環境問題から、将来にわたっての持続可能な開発が重要であることをより多くの人々に理解してもらおうとして運動。しかし、世界人口の多くを占める途上国や新興国の第三世界は開発優先であり、環境は後回しとなる傾向にあり、経済的にも余裕はない。世界各国の間では環境問題にはいろいろな対立があるが、

総意として世界の持続可能な開発に向けての努力は合意を得ている。途上国においては貧困こそが環境問題の根本原因であり、貧困削減のために多くの援助が提供されてきた。援助は70年代の冷戦時代には政治的な駆け引きに使われた面もあった。他方、第三世界は、一次産品に依存する途上国経済は世界の貿易システムにおいて構造的に不利な立場に置かれているとして、国連等において改革措置を主張してきた。しかし、第三世界の中でもアセアンやNIESは80年代以降に次第に経済力がついてきたのに対して、多大の援助を受けたアフリカでは重債務国が増えたことから、西側は自由主義経済にもとづく構造調整計画の導入を救済の条件として援助を継続したが、大多数の国民が貧しく、教育も、技術も、職もない途上国ではさらに格差が広がった。そうしたことから90年代後半から貧困削減が主要なテーマとなりMDGsが目標として掲げられることとなった。近年、先進国経済は不調となり、他方で新興国が力をつけてきて貧困国に積極的に投資をしているが、環境問題に対しても十分な対応がのぞまれる。

### (3) 浅田益章さん（中部ESD拠点の運営委員）

「自分にとって大事なESDはなにか」を考えている。ESDとは10年前から始まった。今2014年にESDとはなんだと考えることは重要である。

#### ① 浅田が思うESDとは

Energy for Sustainable Development(エネルギー)

#### ② 企業系の方が思うESD

Economic for Sustainable Development

#### ③ 環境系の方が思うESD

Environment for Sustainable Development

#### ④ 基本となるESD（人間の知恵）

Education for Sustainable Development

というように、それぞれの人にそれぞれのESDがある。

震災から3年、エネルギー・防災・原発をどうしていくか。異常気象による大災害。人口増加に伴う経済貧困、食糧、エネルギー問題。現在そしてこれからの課題である。地域での暮らし方、そして地球規模の持続不可能な課題への対応力が必要である。低炭素都市なごやのまちづくりが施策として提示されている。ESDの知恵で地域から温暖化問題を解決したい。安全安心で健康的な地域での暮らし方に変えていく。世界各地の人のことを思い、共助を進める。補完性＝プッシュブルの関係づくりが求められている。

最後に「この地域とは何か」という話をしておきたい。この地域の特徴は、

#### ① 伊勢三河湾流域圏の自然豊かな土地。

#### ② 日本列島のど真ん中。文化と物流の交差点。

#### ③ ものづくり日本の伝統と未来の求心地

であり、先進性のある地域である。

2005年に愛知万博、2010年に生物多様性条約締約国会議（CBD COP10）が行われ、今年、2014年はESD ユネスコ国際会議なごやが開催される。次のチャレンジは何か。2014-2024年は、「すべての人のための持続可能なエネルギーの国連の10年（Sustainable Energy For All）」である。

### 3. ワールドカフェ方式：テーマ「開催地モデルを考えよう！」※ラウンド1,2,3を終えてのまとめ発表

#### 【テーブル①発表】 浅田益章さん

ESDは小さなこと、子どもでもできることを心がけて行う。日本と国際と文化を、おもちゃ等で伝える。小さなものづくり、

小さなことづくりといったことを、そういう視点を持って行う。

学校教育だけが、ESD ではない。市民教育が大事。市民と一緒に、地域市民社会で体系的に学ぶことが大事。その中に生物多様性や、環境など、様々なことが入ってくる。つまり、市民教育、民主的な教育を学校も、市民も入って活動するというのが ESD のポイント。企業は、経済だけに走るのではなく、企業が持続していくためには赤字覚悟でも、それを見ている地域社会、消費者に対して社会貢献等やってほしい。企業の広告、宣伝や何かに ESD をやっていると見せることも良いことだと思う。みんなに ESD という言葉を使ってほしい。最後に、「SD」を「ESD」に変換し、推進する。文科省が ESD を 2,3 年前から学習指導要領に入れている。それを受けた小学生が増えてきている。しかし教える先生方が ESD を学んできてはいない、SD はやってきた。SD で学んだことを ESD の形で整理し、それを通して教えることはあり。これから、若い人は初めから ESD を通して SD を理解してくれる。これまで SD を通った人も、ESD は関係ないというのではなく、今までやってきた SD を ESD に変換し、考え直して ESD を進めてほしい。ポイントは SD を ESD に変える。教員は ESD の教え方、コーチング、ティーチングが大切になってくる。

### 【グループ②発表】 武藤一郎さん

ESD の前に SD とはなにかについても話がでた。自分たちが生活する社会に関わるローカルな SD もあるが、SD や ESD が出てきた背景には、地球的課題である環境問題があり、これは国際協力により、国境を越えて対処していかなければならないとの理解が必要。

ESD は一般の人々の間にあまり知られておらず、その理解の仕方もまちまちで、ESD を広めようとしても、内容の話になるとみんなの共通意識が極めて薄い。したがって、教育関係者でも、ユネスコスクールなどにおける ESD に関心を有する人から徐々に認識を広めていかなければいけない状況にある。そして、それを若い人に訴えて社会教育としても考えていくことが重要。ESD とは SD を広めていくためのツールであり「中部モデル」は国境を越えて考えていくためのモデルでとの指摘が出た。

ESD は、社会を良くしていこうという取組の延長線上にある。狭義の教育に限定するべきでなく、理科教育をはじめとする各教科目に限らず、社会を良くしていこうという総合学習のような形での取組もある。その延長線として ESD を考えていけるのではないか、それが一つのきっかけになるのではないかという意見が出た。以上、これら 3 ポイントを一般の人たちに訴えることによって、さらに ESD が広まっていくのではないかという話合いになった。

### 【グループ③発表】 武者小路 公秀さん

「ESD ってわからない」とよく言われるが、個人的見解は「分からなくても良い。あまりそういったこと囚われず、一つの考えにまとめる必要はないのではないか。

国がお上で上から押し付けてくることは全て反対であるということ。反対だけれども、地域は閉ざされたものではなく、いろんな地域と比較してつなげて考える必要がある。しかし、その場合には、生命流域圏を単位とする。広げるけれども、単位はローカルである。

モンサント社などの巨大企業の影響というものによって、地域の中の営みが邪魔されるということが既にアヘン戦争の時にもあった。外からの圧力をどのように跳ね返すかということは一つの ESD。ローカルの所を大事にして、外からの押し課せられてくるものを撥ね付ける力を中から付けなければいけない。

いろいろな教育委員会からユネスコスクールまであり、それらを活かしていかなければならない。ESD 世界会議を開くことが大切だが、ユネスコの枠の中でやっているものである。ユネスコスクールは国際理解教育でやってきたが、最近は環境教育をやり始めた。制度をうまく利用すること。制度を超えてネットワーキングを。中部だけではなく、RCE の考え方が大事である。

中村 絵乃さん（特定非営利活動法人開発教育協会 事務局長）

大学卒業後（財）横浜 YMCA 勤務を経て、渡英。英国ヨーク大学大学院（教育学）でグローバル教育の実践を学び 1998 年に卒業。2000 年より（特活）開発教育協会・事業担当。2006 年 1 月より 1 年間、国際交流基金日米センターのフェローとしてニューヨークの NPO で研修を受ける。地球的課題を扱う教育（グローバル教育・地球市民教育・開発教育）の実践・研究を行なう。2008 年 4 月より、同会事務局長。現在は、研修会等を行ないながら、日本における「対立解決教育」の可能性を模索中。神奈川県横浜市出身。

伊藤 通子さん（東京大学大学院新領域創成科学研究科環境システム学専攻 特任研究員）

3 月までの 35 年間、富山高等専門学校にて技術職員の立場で、「Problem – Based Learning = 現実問題に基づく学習」に取り組んできた。工学系への ESD の重要性を痛感し、「社会に役立つものづくり」や「30 年後のエネルギーを考える」授業、「内モンゴル ESD 研修」など、様々な教育プログラムを開発し実践。一方、高齢化・過疎化が進む里山に暮らし、豊かな自然と昔からの知恵に学び合う場づくりも行ってきた。4 月より千葉県柏市に移り現職。

進行 新海 洋子（環境省中部環境パートナーシップオフィス）

新海：対談ゲストのお二人を紹介する。開発教育協会の中村絵乃さん。開発教育は日本の教育に必要な概念、手法を持っている。開発教育の持つ重要な視点、価値観、手法をお話いただきたくお招きました。名古屋で開発教育は馴染みが薄いかもしれないが、必要だとしている教育の原点を踏まえ、重要と思っている活動をお話いただきたい。伊藤通子さんは、10 年ほど前に私達が ESD-T（東海）を立ち上げた時に、ESD-H（北陸）、北信越の中心として活動されていた。今は活動の幅を広げられて東京大学に勤めていらっしゃる。伊藤さんが富山でされていた高専での ESD 実践としてのモノづくり教育、次世代に向けてどんなことをしてきたかをお聞きしたい。事前に ESD と言えば思い浮かべるような写真を提供いただいている。私と ESD の出会い、からお話しいたください。

中村：開発教育協会（DEAR）は今年 32 年目を迎え、「ESD の 10 年」以前から ESD を実施してきた。世界にある貧困、格差、人権侵害、環境破壊といった問題が遠い世界の問題ではなく私達と関係している。今私達が食べている物、着ている物は世界

中から来ている。それを作っている人の人権は守られているのだろうか。労働環境はどうなっているのか。現地の水が汚れていたら私たちの責任かもしれない。DEAR は、このように、世界とのつながりを通して、より公正な社会をつくる、そのために必要な教育を実施してきた団体である。

私の ESD を話すということだが、開発教育、地球市民教育等との出会いは大学生の時である。国際関係学を大学で学び、どちらかという途上国で何かしたい、貧困状態を助けるために何かできるのではないかと思っていた若い学生だった。そこで出会ったのが NGO のスタディツアーで、自分に何かできることがあるのでは、と考えてインドの貧しいスラムに行き、何かできることはないだろうかと考えていったが、言葉も全く分からない、体力もない若い学生にできることはない。現地の人の方が知識も体力もあり、逆にすぐ助けられた。

日本に住む私達は、他の国より日本の方が優れていて、支援をしてあげようという意識を持っているかもしれない。しかし、まったく逆で、日本の生活は世界中から支えられている。途上国と言われている国々の人々が作ったものを食べ、着ている。彼らの

貧しい原因が実は日本、もしくは先進国との関係にあることに気づいていった。その頃、日本の ODA が世界一になったが、インドの人からは「まずはあなたの国を何とかしてください。日本の ODA がやっていることは全てとは言わないが、私達の国をだめになっている。使えない橋やビルを作る等といったことはあなたの国で何とかして下さい。それはあなたの役割です。」と言われた。そこまでは言われなかったかもしれないが、そう感じ取った。私ができることは世界で何かを変えるのではなく、日本で何かを変えること。それが、私の ESD との出会いです。開発教育では、学ぶ方法も参加型である。レクチャーで話した内容は多くが頭に残らないが、参加型で学ぶ中で、参加者達同士がいろいろな意見を言ったり、そこで起こるジレンマを自分達で解決していくことができる。将来的に社会に参加する人を育てるための参加型の手法であり、社会に出たときに自分の意見をはっきり言ったり、人と協力したり、困った時には自分一人ではなく、いろいろな人に協力をお願いして解決をする、という力をつけることができる。そのような意味で開発教育は手法も目的も「参加」を大切にしている。

もう 1 枚の写真はアイヌ語でニサツタグスチャランケ (明日のための話し合い) というイベントを行った時の写真。開発教育は元々、途上国の問題を扱っていたが、ここ 10 年で一番大きな変化は、日本の中の開発問題、貧困問題をきちんと捉えて、それがグローバル化がすすむ社会の中でどのように起きているのか、を考えるようになった。アジアの農村でも、日本と同様、過疎化が進んでいる。原発事故があつてあらわになった日本の中央と地方の中の格差、地方に依存する中央の体制等は、実は世界中で起きている。私達がアジアから学ぶことはたくさんある。そういったことを含めて日本の中の開発の問題も取り上げていこうと思った。さっぽろ自由学校「遊」と一緒に、アイヌの方々と和人といわゆる日本人が集まって、チャランケ = 話し合いをしようとして 3 日間のセミナーを行った時の写真である。様々な立場の人が集い、対話を通して一緒に問題解決を考えていく、という ESD に非常に重要な視点が実現された

イベントであった。開発教育なのでよりよい「開発」のあり方を重視している。経済中心の開発ではなく、人間開発、社会開発を重視している。開発は 1 つの決まった形があるわけではないので、development ではなく、「developmentS」だと思っている。国や地域、その文化や環境によって、より良い開発のあり方は異なる。お年寄りや、若者、子ども、それぞれにとっての開発のあり方がある。より良い開発について考えることから始めていかなければいけない。そのような意味では、持続可能な開発とは何かを考え続けた私達の 10 年であったと思う。

新海：「開発」というと壊すイメージがある。持続可能な開発のための教育という名前が悪い、だから普及しないと言われることも多い。開発教育と取って「開発」と言っていることは凄みと思っているが、反応はどうか。

中村：development というのは、発展、発達という様々な意味もある。自分が住んでいる地域や社会をつくる、ということも開発と捉えるのであれば、様々な開発がある。私達もそれに参加している。「開発」という言葉が分かりにくくて、開発教育に関心をもってもらえないのは残念だと思う。開発教育という言葉を広げようとしているわけではないので、国際理解教育や ESD、参加型学習という言葉でも関心をもったところから、始めてもらえればよいと思う。社会を自分達が変わえていける、私も参加できると一人でも多くの人に思ってもらえれば良い。皆さんと一緒により良い、公正な開発の在り方を考えるきっかけになればと思っている。

新海：良いキーワードを得た。開発というと、開発したい側がしたい土地に行き、壊す、改変するというイメージがあるが、自分の町をどう発展させていこうか、そのための開発をどのようにするか、について当事者、利害関係者が参加し十分議論をしたうえで判断、選択するというプロセスの構築が十分になされることをうたっていくことが重要であると。ESD はそのための教育であると。名古屋では、藤前干潟をゴミの処

分場にするという選択を回避した。干潟という機能を残すという選択をした。持続可能な開発は、持続可能であるための開発だと理解すると、「開発」という言葉は、そこを上手く見せる、伝えていくキーワードになる。参加、公正であるという状態は具体的にイメージしにくい、できるだけ見せていかないと共感を得ることができにくい。

伊藤：ESDとの出会いは3回ある。1回目は、20代、娘が3歳の頃である。ある目的でアフリカのケニアを訪問し、帰国後に、食べ物を残す娘に母親らしく、「だめだよ、ごはんを残したら。お母さんが行ったケニアという国ではご飯も食べられず、辛い思いをしているあなたと同じ年の子がたくさんいるんだから」と言ったら、「そんな国にお母さんが行って、一体何を食べていたの？お母さんはどこで寝たの？お母さんはいつも、お分けしなさいって言っているけど、その子たちにたくさんお分けしたの？」と娘が言った。それを聞いた時に頭を殴られる思いがした。この子に胸を張って、何かを言えない自分がすごく恥ずかしくなった。私はそれまで国際交流が好きで、外国にも興味があって様々なことをやっていたが、全て自分の興味関心であり、自己満足であった。子どもにそう言われた瞬間に、私はなぜ国際交流をやっていたのかと思い始めた。それがESDとの出会いの第一歩。それから開発教育を意識的に学び、目的意識を持ちながら、ホームステイの受け入れ、国際交流活動や企画等をしてきた。

それからほどなく、また頭を殴られるようなでき事があった。30代の頃である。工業高専に務めていたが、工業高専は中学校を卒業した学生が通う大学の1種で、5年で準学士、7年間学んだら学士の資格を得ることができるというエンジニアを育てる学校である。ある大企業に勤めている卒業生が、職場で論文が2位になったと意気揚々と母校に来た。どんなものを書いたか尋ねると、東南アジアのある国で日本企業の工場エンジニアとして働く立場から、会社がグローバル企業として生き残る方策について論じたものだった。そこにはこの国でのコスト削減に、環境規制の甘さや人件費の低さがメリットの

ように述べられていた。これを見てすごくショックを受け、「その考え方はおかしいのではないか」と感想を卒業生にぶつけたところ、「そんなことは、学生時代に考えたことも無かった。一生懸命勉強して、トップクラスの成績で卒業し大企業に就職してエンジニアとして頑張っているのに・・・学生の頃にもっと色々な社会的なことと科学技術との関係を学びたかった。」と言われた。私はアフターファイブでは開発教育の活動をしていたが、自分の職場は工業系だから関係ないとかで思っ、実践していなかったことに気づいた。これが、第二のショックであり、この時から職場で、社会と科学のあり方を考えるような体験型の教育実践を始めた。

三回目は、15年ほど前、40代の頃に起こった。娘が中学生の時に学校に行けなくなり、私も疲れ行き詰って、一家で里山に引越した。古い農家を買ひ、田舎の人々のコミュニティに入らせてもらい、暖かい人間関係の中で徐々に、娘は健全な自分を取り戻していった。その頃、ESDという活動を知り新海さんとも出会った。村には昔ながらの知恵や人と人とのつながりがたくさん残っていて、とても豊かな暮らしをしている。ESDとは何かを意識せずともただ昔ながらにそんな生活が続いていた。自家製の大豆でお味噌づくりをし、お蕎麦も育てて挽いて打って食べるというような暮らしだ。向かいのおじいちゃんの縄なえの技術が素晴らしく、市内の子ども達にお米は収穫後も捨てる場所が無く全部が役に立つことを教えたいと思い、おじいちゃんに頼んだ。「恥ずかしい、今時どこも使っていないものを子どもに教えるなんて嫌だ」とおじいちゃんは言った。私は無理強いしても思っていたが、イベント当日におじいちゃんがふらりとやって来て、やってやろうと言ってくれた。後日、おじいちゃんが突然来てくれたわけがわかった。おじいちゃんの連れ合いのおばあちゃんが、伊藤さんが村でいろいろやっていることには何か意味があるような気がする、「縄なえの技術が良いと言ってきているんだから教えてやれ」とおじいちゃんを一生懸命説得してくれたとのことであった。ある日回覧板を持って行ったときに、その時はすでに体が動かなくなっていたおばあちゃんが、玄関まで這うように出て来て、



「この村ですっと今まで暮らしてきたが、テレビでは世界中の貧困や戦争のニュースをやっている、日本の国でも子ども達が色々なことで苦しんでいる、変な事件もたくさんある。この世の中、どうなっていくのかね。何か自分達が大事な事を言い忘れていてのではないかと胸が痛い。」と言った。それこそ ESD だと、頭を殴られる思いがした。体も動かない、90 歳を超え老い先の短いことも自然に受け入れている人が、そんな気持ちを持っていて、せめて自分にできることを、と思って、おじいちゃんを動かしてくれたんだな、ということがわかった。その時にこれだなと思った。そんなに肩肘はらずにみんなが次の世代へ伝えていきたいと思っていることが知恵になっていく。少し先に生まれた人が若い人たちと一緒にあって、新しい知恵を生み出していく。そんな風に人々が関わっていくということなのかもしれないと思った。本当に ESD がストンと落ちたのは、この 3 人目のおばあちゃんの言葉だったかもしれない。私はいろんな人と出会いながら、教えられながら、その時、その時で ESD が私の中で変わっていく。そして、その度にまだまだ自分にできることがあるかもしれないと思いつている。

新海：今の世の中を見て、私の中では間違っていない、主流であるべきだと思っている ESD だが、実際はそれが主流にならない。表面的な ESD 実践がほとんどであり、ESD をやっているような感に陥ってしまっている。本質的なところまでなかなか踏み込めていないという現実がある中で、この 10 年間でできてきたこと、できてこなかったことについてお聞きしたい。今後は ESD の本質にもっと踏み込んで、もっと説いていかないといけないと思っている。自分自身の反省と今後について、少し問題提起をしていただきたい。本日まで参加いただいている方は少なくとも ESD を知っているもしくは実践されている方が多いと思うので、今までの成果、落としてはいけない重要な点、この本質をついていかなければいけない点をお聞きしたい。

伊藤：私がこの 10 年で一番力を入れていたのは職場である。地域も家族も大事だが、職場が一番、広く

社会とコミットメントできる場であり、今の自分のこの年代でしなければいけないことだと思ってやってきた。しかし、学校はなかなか変わらない。高専でさえ、と敢えて言う。高専は過酷な大学受験がない。ないにも関わらず、なかなか ESD が入らない。学びの本質という点について議論されないことが残念だった。学ぶということは、人から与えられる、教えられる、正しい答えがあってそれを伝える、ことであるという固定観念は、なかなか変わらない。もちろん、徐々には変わっている。特に日本の場合には受験の影響がかなり大きい。自分らしく生き、社会の一員となっていくための力や、そのための学び方を身につけるべき大事な 10 代、特に 15 歳から 18 歳、下手をすももっと小さい頃から受験勉強をしている。そんな大事な時期に一生懸命、受験に受かるための勉強をせざるを得ないわけなので、一番つく力はそういう力になる。例えば、個人の成績のための筆記試験では人と協力することは必要ない。青年海外協力隊でガーナに行き戻ってきた友人から、ガーナでカンニングするのを叱ったら協力し合うことが何でいけないのか、と言われたという話を聞いたがまさしくそうだ。自分はこれが得意だから、お互いに助け合っているのに何がいけないのか、という話である。受験はそんなこととしてはだめで、教え合ったらいけない、協力してはいけない。目的は良い点を取って志望校に入ることだ。自分一人で完結させる、といった社会ではほとんど使わないような力を一生懸命に養い、成功する。成功することは大きい。成功体験はすごく自信になる。それは一生、自分を支えていくものになる。受験の成功体験があればあるほど、何か ESD が求める学びとは違う方向に行っているのではないかと考える。小学校・中学校ですごく良い実践がされているが、大学での専門の学びにつながっていない。どうしてこんなことになるのか。大学というところは社会に直接結びつくスキルを身に付ける場所であるはずである。小学校の時のグループ学習は良かったね、社会体験も良かったねと、ただの思い出になってしまっていて、自分のキャリアデザインとしっかり結びつかない。そんなところを ESD の 10 年で変えたいと挑戦してきたけど、なかなか変えられない。でもこれから

もやりかたを少し変えながらやっていこうと思っていることである。

新海：どうしたら変えることができるか。

伊藤：まずは教員が自ら学び始めることからである。例えば、みなさんの中で工業系の高等教育機関の方はいらっしゃいますか。ESD の大切なこととして、技術と制度と人の意識、がある。技術立国である日本の技術を支える人たちが、またその教育に関わる人たちがここにきていない。それが残念。しかし気づき始めている人がたくさんいる。去年、富山高専で DEAR 主催の ESD の全国大会を開催したが、そこには技術系の大学の先生、理科の先生がたくさん参加された。考え始めている人はたくさんいる。先生方が自主的に行う色々な勉強会も始まっていて、学生が学ぶことも大切だけれど、教員自身がまずは学び合うことも大切だと思われ始めている。上の機関にしくみをつくって欲しいとアピールすることと同時に自分たちが行動していくことも大事なので、自分ができることを地道にやっていこうとしている。

中村：開発教育協会も、ESD があったからでもあるが、会員の方とともに、地域の問題に向き合ってきたと思う。プログラムのテーマとして地域を取り上げるのではなく、地域の人たちが地域の問題とどう向き合うか、それを世界へとつなげてどう考えるかという視点である。そこで気づいたことは地域こそが社会参画の場であり、社会変革の場であり、地域こそに価値があるということである。先ほどのアイヌの話もそうだが、沖縄だったら沖縄の、名古屋であれば名古屋の問題・課題がある。地域の課題はグローバル化の中でどのように起きているのか、を考えると、単発で起きているのではなく、いろいろな場所で根幹を同じくする問題が起きていることに気づく。その構造的なことを捉えないと、地域だけの問題になってしまう。その問題と、そこに生きる大人たちと子ども達がどう向き合っていくのか、それをどう教育に取り入れていくのか、を考えていくことが今後ますます必要になる。地域にこそ希望があると思っている。逆に中

央集権的な制度を変えていかないといけない。教育がもっと分権化して、それぞれ「developmentS」があるのであればいろいろなテーマや手法があるはずである。地域の子も達にあった、もしくは地域が持っているリソースが最大限に活かされるような教育の取り組みが、この 10 年で見えてきたのではないかとと思う。そのことが良かった点ではないか。ただ一方で、最近よく言われているグローバル人材の育成については、グローバル化に対応できる人間、自由主義経済の波に乗って成功する人を育てようとしているようにしか見えない。グローバル化はどのようにして起きているのか、だれがそこで一番利益を得ているのか、だれが一番困っているのか、いろいろな視点から今起きている事象を考えていくと、今まで見えていなかったものが見えてくるはずである。

ESD は事業、授業ではなく、そういった視点をたくさん持って、システムを変えていくことだと思っている。だから何か事業をやって、評価して終わりではなく、おかしいなと思っている枠をまずはみんなで見直す。枠の中で一生懸命、やってもその枠を強化するだけである。この枠そのものを問い直すことが必要である。富める者はどんどん富んで、弱者はどんどん弱くなり、格差が広がるような社会をつくっているのは何だろう。一人一人の意識もあります。しかし、もっと大きな力が動いている。そこにみんなが気づいて、枠の外から考えないといけない。そう考えると教育のあり方も別の視点で見えていくことができる。構造的な視点、批判的な視点、多様な視点、それをみんなまで考えていく。

事業をどう評価をしていくかということが今課題としてある。みなさんが 10 年間やってきたことをどう評価するのか、ESD をどう評価するのかという課題がある。外部評価も必要ではあるが、まず実践者自身が自分のやっている取組を評価することが重要であると考えられる。同じことを繰り返していると、その場ではなかなか上手くいくが、それでいいのかなと思えてくる。10 年間やって、自分の実践がどうだったかと思った時に、自分の実践を振り返る視点を持っていないと、また同じことを繰り返してしまう。振り返るための自己評価ハンドブックを作成した。そもそも評価の視点を最

初から持っていないと評価できない。どういう目的で実践するのか、何に価値を置き、それをどのように図るのか、をあらかじめ考え、実践後には、振り返ることで、新たな視点が生まれてくる。

新海：構造的に捉えることは、非常に難しい。なんちゃっての環境教育や ESD（ばかりではないかと指摘を受けることも多々ある。脱「なんちゃって」にするには、深掘りというか、システム、構造的を変えるという視点のアプローチへと改善しなければいけない。時間はかかるかもしれないが、そこを見据えて今何をすべきかを考えないといけない。どのように構造的なところにアプローチしますか。

中村：開発教育で良く使う視点で、コンパス分析がある。一つの問題を、4つの視点から見る。その4つは、東西南北で、E：イースト、W：ウェスト、S：サウス、N：ノースで、E：Economy：経済的な視点、W：Who decides?：政治的な視点、S：Social：社会的な視点、N：Nature：自然・環境的な視点、Eは経済的なので、経済的な活動や利益、経済へのアクセス等を見る。Wは誰が意思決定者なのか、誰が責任をとっているのか、などの政治的な視点を考える。Sは社会なので、社会的な、文化的な価値や、ジェンダー的な役割について考える、見る。

Citizenship 教育なども、最近話題になるが、これもツールではなくクリティカルに今の社会を読み取る力だと思っている。つまり、政治教育だと思う。今どんな人がどのように政策を決め、自分の住んでいる地域や、自治体、国を動かしているのか、を把握し、評価することが重要である。出てきた政策に対して問題があれば、反対だけではなく代替案を出していく必要があるし、そのプロセスをどう作るかということと一緒に考えたらよいのではないか。みんなが文句ばかり言っても社会は変わらないので、自分が市長になったらどうするかとか、実際にその内容を市長さんに伝えるなどの学習を実施することはできる。どういうシステムで物事が決まってい、そこに私達がどうやったら参加できるのか、参加ができない

のであればなぜなのか、など一つ一つ読み解いていくと、具体的にどのように取り組めばよいのか、分かってくる。大きなことでなくても、学校の中、クラスの中のことでもよい。モノを決めていくときに、子どもたちが自分でオーナーシップを持って決めたと感じられることを積み重ねていく。そうすると、少しずつ社会に近づいていく。システムの中に私たちが組み込まれているのであれば、それを変えるために今と違う行動をしなければいけない。そういうことも含めて ESD を捉えていかなければいけない。

新海：ESD は課題別の分野で話されることが多いが、基本は、参加して決める、公平さを担保する、といった基盤となる大事な価値観がある。その視点であるからどの分野の課題をテーマにしても ESD は実践できる。

伊藤：学校教育の立場からお話すると、GAP 資料の原則 5 の D に「ESD は教育、及び学習の中核に関連しており、既存の教育実践の追加的なものとして考えられるものではない。」と示されている。この考え方が日本の学校教育でとても大切である。

教育視察で実際に見てきた、デンマークでされている教育がまさしく ESD であった。資源もない、小さい国だが、日本と同じ食料自給率、エネルギー自給率だったのが、この 10～20 年で食糧自給率 300%、エネルギー自給率も 100 数十パーセントで、逆に輸出しているくらい自然エネルギーや農業技術を上げ、国の経済力もあげてきた国である。そのための国の施策や方向性は、投票率 80%という高い民意が支えている。いろんな調査で国民幸福度世界一となっている。小さな国なのに世界シェアトップクラスの企業をいくつも持っている。

教育が今のデンマークを作っているとさえ言われている国で、本当に教育がすごい。社会、数学、国語も全部 ESD。全部がつながっていて、特別な授業だけで ESD を学ぶのではなく、全ての教科を ESD 的に学ぶので、ESD が目指している価値観や思考、スキルがつく。子どもたち個々の学びの目的も自ずと変わってくる。そういう教育があのような国を

作っているのだと思った。日本では教室の中で、子どもと一緒に評価したり、子どもが学習内容を選んだりしていない。もちろんカリキュラムは大人がつくるが、その中で子ども達自身がもっと効果的に学ぶ方法を見つけ出したり、社会と関わりながら学ぶことを選んでいく。生活科だけで ESD をやるとなるとどうしても表面的になってしまい、学びそのものを変えることにはならない。デンマークの教育は、カリキュラムの作り方、手法、教員の研修制度、社会とのつながりなど、日本とあまりにも状況が違うが、学ぶべきことが多いと思ひ、紹介した。

新海：今 GAP を紹介いただいたが、世界会議のときに世界の人たちといかにアウトプットするかという運びになる。これを使って私達が自らの国のスキーム、プログラムを変えていこうとするときに、GAP をいかに地域で実現していくか、もしくはデンマークの人たちと、そういったことをどう議論するかといった会議ができるといい。開催地だからではなく、次を見据えてどう活用するかということを考えられたらいいと思う。  
フロアーから質問、意見を聞きたい。

フロアー：デンマークにはユネスコスクールのネットワークはあるのか。あればリストなどあるのか。愛知県でユネスコスクールを増やそうと活動しているが、世界会議終了後もユネスコスクール間の情報交換がたくさんできる状況になるのか？

伊藤：ユネスコスクールについては情報が無いが、実は調査したデンマークの小学校、中学校、高校、大学ではある教育手法 PBL(プログラム・ベースド・ラーニング)という「現実問題に基づいた学習」を開発し実践している。特に工学教育の PBL はオールボー大学で開発・研究され、オールボーモデルと呼ばれ、ユネスコチェアとしてアジアやヨーロッパの国々などの範となっている。それが世界中の工学教育を ESD 的に変えている。ユネスコというつながりはある。デンマークの小中学校で面白いことを聞いた。私たちの事を儒教的な東アジアの国々の教育はすばらしいと。中国の哲学者たちに学ぶべきことが多いとも言っ

ていた。デンマークでは違う視点から日本の教育に興味を持っていることを感じたので、ユネスコスクールでなかったとしても、相互に学び合える。

新海：世界会議をどのように活用し、ネットワークを作るかといったチャンス。ユネスコスクールをいかに活用するかを考えていきたい。情報が入りにくいので、EPO の役割としても出していかなければと思う。

フロアー：今、「自己肯定感」が重要とよく言われている。自分自身の考え方と他から要請される考え方との対立は学校、社会の中でもある。他者からの要求に応えなければいけないという姿勢が多かったと思うが、逆に自分はこう思うという考え方をできる存在を多く育てていけば、この社会も大きく変わってくるのではないかと思う。そこところが要だと思うがどうお考えか。

中村：まさにそうだと思う。大学で非常勤をやっているが、教職課程の学生達にも最初にはセルフエスティームのワークショップを行う。本当に簡単だが、石ころを一人一個拾って持って、石ころと仲良くなって、良い所を見つけて、会話して、石ころを元にもどして、再度自分の石ころを探す、というプログラムである。どうってことない石ころが、数分後には、はっきりと他とは違うものになって、みんなが自分の石ころを見つけることが出来る。その石ころは世界に一つであり、同じものはなくて、人間だったらさらにどの時代、地域を探してもあなたと同じ人はいないと言うことを理解すると。大学生ですら、その石ころを大切に持って帰ったりする。それくらい私達は普段認められていないことに気づく。大人がそうなので子どもはもっと思っているだろう。自己肯定感自分だけでは絶対に育まれないので、他者と一緒に行く。協働ワークショップが自己肯定感が高まる機会になる。ESD を通して、子ども達（大人も身に付けたほうがいいが）が「自分が大切な存在である」、「自分がオンリーワン」、「できること、できないことを含めて自分である」と自分自身を認めることをベースに、次は友達のこと、世界のこと、と広がっていくのが大切な視点である。

伊藤：日本ほど若者の死因で「自殺」が多い国はない。珍しい。その中でも、技術者が多らしい。新聞が何かで見て、データの裏付けを取ろうと思ったが、どこにも載っていないが、ショックだった。さきほどの卒業生の話ではないが、自分が一番だと思って社会に出て否定される。学校の中で成功してきたものが、社会で重宝されないという現実がぶつかって、自分が悪いと思ってしまう。育てる側としては、この国の技術を支える技術者の自己肯定感が低いということがとても残念。原発の事故が起こり、ますます彼らは委縮している。自分達が信じて学び、やってきた技術が本当に大丈夫なのか。若者の分科会でも「専門家をどんどん、町に引っ張り出してください。」と言ったが、一緒に学ぶしかない。専門家を専門家だけの中に押し込めていて、外から批判しては、専門家もダメになってしまう。一緒に学び合う場を作り、関わり合っていないとだめだと思う。明るい話題として、技術者倫理という分野のある工業大学の先生が良いことを言っていた。「技術者倫理では何を目的にすべきか、本人が幸せになる事だ。倫理をしっかり学ぶと、幸せになる。幸せな技術者には良い技術が生み出せる。」ポジティブ・サイクロジーという心理学の分野の考え方で、ビジネス界を中心に取り入れられているようだ。成功した人が幸せになるのではなく、幸せな人が成功する。その根本に私は、社会や人とのつながりの中で獲得する揺るぎのない自己肯定感があると思っているので、とても大切な概念だと思う。

新海：2014年以降、何をされるか。2014年ミッションとしてこれはやる、やり遂げるといことなど決意、思いをお聞かせください。

伊藤：今までやり続けてきたことをやり続けようと思っている。35年間、高専にいた。定年まであと5年というところで東京大学に移ってきた。今度はフィールドを変えて、現場にいたときには行き詰まり感を感じてできなかったことに挑戦し続けたいと思っている。

高専の技術者教育をより良く変えていこうというグループも生まれ始めている。自分が現役の間には変わらなかったが、同じ思いの若い人を増やしたい。今、富山高専に、私がESDを始めた15年以上前に学生だった卒業生が教員として戻ってきた。学生時代に自分が受けたESD的な技術者教育を、今度は自分がやろうと頑張っているのも側方支援をしたい。そんなふうにして若い人に伝えていって、一緒にこれからの技術者教育を考えたい。今の私の立場や研究分野「環境安全学」からのアプローチで、現場で実践しようとしている人たちを応援する。ということをやりたい。

中村：今やっているものを続けるためには、新しい視点を取り込んだり、みなさんをそそのかしたり、しながら、活動を続けていきたい。私自身も自分を振り返ってみて、自分から変わることが重要だと思っている。周りをなんとか変えようではなく、自分がまず変わっていく、それがみんなにつながっていく、それがESDであると思う。

外部から力を加えて、変化を起こすのではなく、それぞれが持っている力を発揮して、内発的に起きる変化が必要である。一人一人の子ども達が宝を持っているように私たちにも、社会、地域にも変化を起こす力があると思うので、そういうことを信じながら、引き続きさらに良い10年になるようにみなさんと一緒に活動していきたいと思っている。

コメンテーター：中村絵乃さん

伊藤通子さん

コーディネーター：新海洋子(EPO 中部)

### ■ 1 ラウンド～各分科会報告

#### ● 第 1 分科会 若者×ESD=未来・・・「ユース」

##### ～水野翔太さん（名古屋わかもの会議）

「若者×ESD=未来」という分科会を行った。ESD 活動を行っている団体にプレゼンテーションをしていただき、Candle Night Nagoya 実行委員会副代表の河村さんから「震災を忘れないことが重要」という話、豊田東高校生から「身近な視点が世界の環境問題につながっている」という話、名古屋わかもの会議の取組から「地元のことを考える大切さや楽しさ」についての話がされた。その後、高校生×ESD、大学生×ESD、地域×ESDのグループに分かれ、ディスカッションをした。

高校生×ESD では、そもそも「ESD の印象は？」をテーマに話をして、高校生らしい視点が斬新でおもしろかった。豊田東高校生から、ESD を「E え」「S そんなこと」「D できちゃんだ」と ESD を簡単にとらえているという話があった。

大学生×ESD では、ESD をあまり知らない、初めて聞いたという大学生を対象に、「夢」について語り合う時間を持ち、その後に里山やアフリカの野生生物の写真を見ながら「命の大切さ」や「持続可能なこと」を考え、ESD が大切にしていることを含めて、再び「夢」を考えてみるというディスカッションを行った。「自分だけではなく、他人とつながって未来を形成していくことが大切ではないか」等が話し合われた。「地域×ESD」は既になんらかの ESD 活動を実践している、知っている大学生を対象に行き、「『人と人のつながり×地元愛』が地域の強さではないか」等を話し合った。

分科会のまとめとして、「種を植えることが必要であり、そこは教育現場が担う必要がある。小学生の頃から ESD に関わっていくことでその後につながっていく」ことの重要性を確認した。また、情報発信をする際に、「一方的ではなくお互いに分かりあって共感し合うことが大事だ」という話があった。

GAP のユース部分に、「ノンフォーマルとインフォーマル学習でますます教育の推進者となっていく」と書いてあるが、学校の教育や勉強は当たり前だが、外部に出ることで新しい視点や違った考えが得られるので、どんどんつながっていくことが重要であるとも思った。未来を担っていくのは私たち若者なので、若者の意見も無視するのではなく、もっと若者と大人が一緒にやってこそ ESD につながっていく、と考えた。

#### ● 第 2 分科会 ESD(答えのない) 授業をつくる～学校でいかに展開するか・・・教育者

##### ～中村羊大さん（愛知県立豊田東高等学校）、内田裕斗さん（岡崎市立梅園小学校）

第 2 分科会の参加者は、20 代から 30,40 代、60 代を超えているような方など多種多様でとても濃い分科会だった。最初に「答えのない授業とは」をテーマに、元校長先生と元中学校の先生の対談を行った。ESD を 10 年やってきたそれぞれの先生の想いが溢れていた。ESD を小学校で実践するときには、人権教育や人間教育という視点が重要である。平たく言えば「モラル」をつくることが ESD ではないかと話された。ESD は「環境」が大きく取り上げられがちだが、多種多様な観点があり、モラル教育、特に「自己肯定感」を育むことをベースとして実践してきたと紹介された。

小学校の実践として岡崎市立梅園小学校、高校での授業実践ということで愛知県立豊田東高校の取組を紹介した。その後「ESD 授業」のブラッシュアップを行った。テーマの「答えのない授業をいかに仕掛けるか」という観点で、模擬授業を行い、その後フロアでグループディスカッション、フリップディスカッションにてどう改善していくべきか話し合った。梅園小学校の昨年度の取組では、ESD では「つながり」を大事にしたい、とにかく「つながり」という観点で、被災地との

交流を全校で行ってきた。「今私たちができることプロジェクト」をテーマに実践したが、本年度さらに磨きをかけるためにどうしたらいいかということを考えてきた。そして、自らの生活につなげていきたいということで授業を計画した。この授業はまだやったことのない授業である。模擬授業中は、参加者に真剣に考えていただき、建設的な意見を得ることができた。授業を実施し、気づかされたことが多かった。この空間こそ ESD だと感じた。今日は来る時はスカスカのスポンジのような状態だったが、他の先生からたくさん水をいただきパンパンの状態である。月曜に子どもたちに会ったらギューツとしぼって水を出し切るぐらいに子どもたちにぶつかっていききたいと話された。

### ●第3分科会 ESD、なごや環境大学の担う役割・・・「地域コミュニティ」

#### ～松本イズミさん(なごや環境大学実行委員会委員)

なごや環境大学というものがそもそもなんなのかということをお話したい。「街中がキャンパス」をキャッチフレーズに環境首都なごやをつくるため、持続可能な社会を支える人づくり、人の輪作りを目的にしている。2005 年から始まり、来年開学 10 周年。大きな特徴は市民、企業、大学、行政それぞれの立場を超えて目的に向かって協働し運営していること。共育講座は、市民や企業の方の多彩な講座が開催されている。「名古屋うごかそまい」というプロジェクト型のプログラムがあり、市民ムーブメントをつくることや講座の参加者や企画者の横のつながりを強化する取組がされている。幅広い環境情報の提供を目的に環境ハンドブックを発行している。なごや環境大学の一番のウリは、共育講座。多様なセクターそれぞれが自分の持っているものを持ち寄って作っていくというのが特徴である。年間 600 コマ開催、延べ 2 万人以上の参加者、市民活動団体が主催している講座の割合が大きい。

今日話し合ったことは、「ESD 推進のためになごや環境大学の仕組みをどう活かしていくのか」である。なごや環境大学の仕組みの到達点とメリットは、グローバルアクションプログラムの「地域コミュニティ」の内容とそのまま合致しているのではないかと読み解きをした。先ほど「持ち寄り」という話をしたが、「持ち帰り」が必ずある。受講生が企画をする方になることもできるし、逆に企画をしている方が講座を受けることもある。受信と発信が繰り返行われて人が育っている。企業も含めたすべての人・組織が主体的に関与できる。誰かに強制されるのではなく、自分の意識で行動し、発信していくことができる。そして、広範囲なテーマを扱えることができる。身近な問題から大きな問題までであるが、いろんなことをテーマとして取り扱える。大きな意味での環境ということを扱っていける。共育講座を企画実施している方から発表があったが、環境大学の講座ということで社会に対する信頼度が増したと、ということも活用方法である。NPO は信頼度が低くて、なにかやりたいと思ってアプローチしてもうまくいかない場合があり、なごや環境大学の名前があれば、話が通って活動が広がる時もある。企業が市民とつながることのできる良い仕組みとスライドにあるが、企業も参画することができ、企業が社会的な努力をしていたり、自社の環境活動を発信していく場所になっている。1人でできないことに取り組めるのは大きい。一つの NPO だけでは解決できないような問題や、アプローチできないようなことができるのが環境大学のプラットフォームであり、そこに集まる人や情報を活かしていくと協働の可能性が広がる。関わる全ての組織が変革・発展できる柔軟性をもっており、組織自体も変わり続けられる。受ける人・企画する人・運営側の視野が広がっていくのが大きななごや環境大学の特徴である。今日参加されている方は柔らかさがあるので、「持続可能」に対応できる。

今後すべきことについては、まずは学校との連携で、小学校中学校と連携していきたい。二つ目は、地域で活動している団体ともっとつながること、地域に根付いた団体と協力連携である。3つ目は、幅広い市民へのアプローチと学びのきっかけである。環境活動に参加していない人にアプローチしていく。4つ目は、もっと学びのきっかけづくりをし、プラットフォームとしての機能強化、いろんな人が集まるプラットフォームでい続けたい。そのためにも広報と PR、周辺自治体との連携が重要である。今後、こういう仕組みを持った自治体が増えてくるであろう。他自治体とも連携しつつ、お互いに発展をしていく横展開をしていく。

### ●第4分科会 ESD 推進の開催地モデルを考えよう！・・・機関包括型アプローチ

#### ～浅田益章さん(中部 ESD 拠点)



第4分科会は、話題提供者3名、中部ESD拠点のメンバーである武者小路さんと武藤さんと私が市民と個人の目線での問題提起を行った。私自身については、7年ほどESDに関する活動に関わっているが、今になってもまだESDについてはっきりしない。それぞれの人にとってのいろんなESDがあるという仮説に落ち着いている。エネルギーに関心のある人は、「Energy for SD」、企業の人にとっては「Economic for SD」、環境問題に関心ある人にとっては「Environment for SD」。一番のベースは「Education for SD」。Educationは教育よりもっと深い意味を込めて「人間の知恵」という言葉で理解している。

今回は、「ESDとは何か」と「伊勢三河湾」という中部ESD拠点のキーワードを中心に議論をした。私のグループでは、国連大学が提唱している「すべての人のための持続可能なエネルギー」についての話をし、参加者の意見を聞いた。参加者から「身近な小さなESDをやります」と言った方がいる。愛知は大きなモノづくりが得意だが、小さなモノづくりにもESDを取り入れていくことがよいのではないかと。2つめは「市民教育」が大切という話になりました。ユネスコスクールや学校での教育も重要だが、市民が参加するオープンカレッジ、井戸端会議も大事であると。3番目は、企業について悪者のように言う人も多いが、CSRや広報力があるのだからESDを広めてもらえばよい、と発言される方もいた。4番目は「SD」を「ESD」に変えることが重要であるという話になり、SDを十分にになった世代が、後付けでESDに整理し直して、次の世代に教えるという方法もあるのではないかとということだった。子どもたちにESDを教えることができる、そういった人材を活用するということである。武藤さんは海外の国際協力の視点からの話をされた。武者小路さんは、ESDというのはみんな分からないが、分からなくてもいいのではないかと。国がトップダウンで押し付けるだけではなく、草の根のESDも大事であり、2つの方策が必要であり、後者は地域から生まれるものである。また、制度をうまく利用して、制度を超えたネットワークをつくりESDをすすめよう、という話であった。

新海：それぞれの分科会の発表は、ESDの真髓をついていたと感じる。GAPもある意味で当たり前のことが書いてあり、いかに具現化するか深めるかが地域の力量である。その深みを話されていたようであった。提案も大事だが、実際に動き始めること、実行して変化を生み出すことは重要であり、政策や施策の提案をしつつも、地域でつくりはじめ、成果を社会に見せていくことが大事かと思う。

## ■ 2 ラウンド～行政の取組とこれから～政策的支援

### ● 愛知県 橋本博巳さん（愛知県環境部ESD会議支援室長）

愛知県では環境学習基本方針を平成17年（2005年）に作った。たまたまだが、今年は愛知環境学習基本方針の策定と愛知が万博以降10年目、そしてESDの10年が今年になる。基本方針策定当時から出会いや学び合いを盛り込んでいることについては大きくは変わっていない。そういったことを意識して指導者の育成、学習の講座の実施、情報提供をしている。万博の成果が今のモリコロパーク、「森の学び舎」といった学習施設となっている。万博は私も数回行ったが、会場は、自然の体験ツアーやバックヤードツアーなどが行われ壮大な環境学習の実験の場であった。これを契機に県内のあちこちで環境学習の取組が始まった。さらにCOP10で意識が高まった。

昨年に環境学習基本方針を改定して、行動計画を作った。ここに入れたのがESDの視点である。今までは環境学習といえば環境面だけであった。それに内容を深めた。その成果が今年発行した「わたしたちと環境」という小学校4～6年生対象の向けハンドブックである。愛知県内の各小学校に配っている。今までは「環境」といえば水、大気、自然、ゴミ、地球環境だったが、冒頭に「愛知県ってどんなところ？」というテーマのページがある。要するに地域にもっと目を向けましょうということである。愛知の人は地元観光地がないと思っているが、愛知もいろいろあることを示している。そして最後に「未来のことを考えましょう」とテーマを入れた。これが環境部の出している冊子かと思うような内容である。非常に幅広い視点を持ったハンドブックを作った。先ほどデンマークの人の話がありました。ESDが学習システムとして入っていると。



気づかないうちに学んでいる。それが、若干でもこの愛知のハンドブックに入っているの、そういう視点も交えながら今後も進めていくことを考えている。先ほど ESD の E は Economy になり、Environment になり・・・という話があった。環境学習も「学」という字では硬いので、個人的に「楽」でいいかなと思う。Education ではなく Entertainment の E でもいいと思う。そのくらいの感覚で、楽しくないとおもしろくない。続かない。今年は「クールビズの 10 年」でもある。10 年前に小泉首相の時代に始まった。要するに「楽」な物こそ広がる。「楽」というのは楽しむと同じ。「楽」だから楽しむ、だから広がると。そうしないと ESD もなかなか広まらない。そういう視点で進めていかないといけない。

#### ●名古屋市 川原田真弓さん（名古屋市環境局環境企画部主幹）

名古屋市の今までの環境学習ですが、古いところでは 1991 年に地域における環境教育ということで地域の資源を活かしながら、保健所が中心となって学習会や観察会をやってきた。それから環境学習センター「エコパルなごや」という体験型の学習施設の設置、そして、次世代環境学習として幼稚園・保育園・小学校等への環境学習の支援応援ということで「環境サポーター」という市民先生を派遣する事業を行ってきた。そして「なごや環境大学」。この 4 つを四本柱という形で進めてきた。特に環境大学に代表されるように行政だけではなくて市民・事業者・大学・地域の方々に支えられながら続けてきたことが特徴である。環境教育という名前がある程度根付いてきて、「環境教育をしなくちゃいけない」という時代から変わってきて、今は ESD である。先ほど愛知県から環境学習の行動計画を作成したという話と「私たちと環境」という冊子を作成したという話があったが、名古屋市はこれから「環境学習行動計画」を作ろうとしている。いまその前段階であり、その策定に向けて「環境首人づくり懇談会」を開催し、関係者の意見を得ながらどんなものを作っているかと検討している。

#### ●環境省 高木丈子さん（環境省中部地方環境事務所環境対策課企画係長）

環境省の取組について話す。環境省では環境教育推進法を促進法へと改正し、「ESD」「協働」などを盛り込んでいる。ESD については、「+ESD プロジェクト」で市民や企業を応援する HP を作ったり、参加するための仕組み作りをしている。昨年度から実施している ESD 人材育成事業においては、公募した環境教育・ESD モデルプログラム 20 を掲載した冊子と、そのモデルプログラムを地域化し、全国 47 都道府県の小中学校等で実証した事例を掲載した地域版モデルガイドブックを発行している。環境省では環境教育の切り口から ESD を根付かせていく。教員向けの情報も QR コードで読み取れるので活用していただきたい。来年度までの 3 ヶ年事業であり、よりブラッシュアップしたプログラムをつくり、実証し、充実化をして地域に落とし込み、環境省の予算がつかなくても地域が主体になって ESD 実践ができるように後方支援をしていきたい。中部環境パートナーシップオフィスが中心になってサポートをしている。ESD については、2014 年以降も実施することになるし、GAP で明文化されれば、環境省だけではなく、国交省であれば河川教育、農水省なら食育など幅を広げていくことが国としては必要である。国だけではなく、県や市町村にも広がるように広報していきたい。

新海：愛知県、名古屋市、環境省の取組を聞いた。対談にもあったが、政策形成のプロセスにいかに関わるか、参加するかが重要である。そこに「構造」を変えるキーがある。もっと政策について対話しながら議論する場を作っていきたい。三者の共通項は、行政だけでは変えられない、ということであった。もっと効果を出すにはみなさんと一緒に、協働で実施したい。私たちには参加の余地がたくさんある。

## 質問

フロア：名古屋市の環境局への質問だが、四本柱の中で保健所が ESD の拠点として取り組んでいるという話があったが、具体的にどんなことをやってきたのか。

名古屋市：これまで ESD の拠点として取り組んできたという意味合いではなく、地域における環境教育として、地域に根ざした学習会や環境展などを行っている。今後どうやって ESD につなげ、発展継承していくのかが大きな課題である。

新海：ぜひ提案を出し合い、地域の重要な拠点である保健所での ESD 展開を検討したい。そういった提案できる場、機会があるとよい。

### ■ 3 ラウンド～ESD 事業に伴走する組織の取組とこれから～機関包括的アプローチ

#### ● ESD ユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会のこれから

##### ～鈴木麻友美さん（ESD ユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会総務・調整グループ主任）

支援実行委員会について簡単に説明する。経済界などと一緒に誘致活動を行った。多様な機関と連携して設立、活動の柱が 4 本あり、会議支援、地元魅力発信、ESD 普及啓発、取組み促進である。会議自体はユネスコや文科省が進めるので、会議の周辺整備を行う。様々な人が愛知名古屋に来て、世界会議も開催されるので、地域の魅力の発信や普及啓発を行っている。また、いろんな形でいろんな手法で ESD に取り組んでいる人たちを応援している。普及啓発や取組み促進を県内 54 市町村への協力依頼をしているが、「自治体職員のための ESD セミナー」を開催した。590 人の自治体職員が参加した。これはすごいことである。全自治体の職員、環境や防災などいろんな分野の職員が参加した。その研修の成果や愛知県内の市長村の ESD 取組を紹介したのが「自治体職員のための ESD ハンドブック」である。会議が終わって ESD が忘れられないようにいろんな人を巻き込みながら取り組んでいきたい。

#### ● ESD-J のこれから

##### ～村上千里さん（認定 NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議事務局長）

ESD-J は 10 年をきっかけによりよい社会をつくって行くための教育がどんどんひろがっていくように思う人で立ち上げた NPO。愛知・名古屋にも 2003 年のキックオフミーティングから関わっていて何度かこのような場に参加させていただいてきたが、いろんな人に広がっていくのが自分の励みでもあった。2014 年以降に向けた動きと、ESD-J の取組について紹介する。

そのまゝに、日本の ESD の特徴のひとつに環境行政が全国各地で取り組んでいる、という点がある。他の国では、文科省のような教育機関が学校教育に取り入れていくのが主である。このような背景から、日本の特徴は、大人も一緒に環境や国際理解の活動を地域づくりと絡めながら広げていることである。「村を捨てる学力から村を育てる学力へ」「地方自治は民主主義の学校」、そんな考え方や取組みが広がっているし、今後もっと広げていきたい。

ESD の 10 年をふりかえると、最初はスロースタートだったが、2009 年中間年以降ユネスコスクールに文化省が積極的に取り組み始めたことで徐々に動き始め、2014 年の総括会合にむけて、ようやく盛り上がりを見せている。2014 以降が少々心配だが、10 年が終わっても進んでいくように国がきちんと旗を振り続けてほしい。そして地域や学校に広げていくネットワークを強めて広めていきたい。

国際的な動きは、ユネスコがリードしている。2015 年以降は「新たな 10 年」でなく、グローバル・アクション・プログラム（GAP）を作ることで方向性が打ち出される。GAP に市民の声を届けられるのかという質問があったが、この文章はす

でユネスコで採択されているので変えられない。しかし、この枠組みへのコミットメントの公募が始まっている。国や地域や学校がコミットメントで参加できる。web サイトで募集を開始した。

ESD-J は、2015 年以降も ESD を続けていくことの提案をしている。今は文科省と環境省が頑張っているが、連携が十分にできていないことがある。国レベルでの ESD 推進体制を分かりやすくするために、両省が相乗りした国レベルの推進拠点を作ってほしいと提案している。愛知や岡山や気仙沼などのすばらしい取組みが他の地域に影響する施策を展開できるように提案している。ESD-J もコーディネーター研修をするなどプログラム開発し、映像教材なども制作している。

世界会議では、日本の特徴ある取組みをアピールできる参加の場を、ESD-J として作っていききたい。各地に地域ミーティング開催を働きかけ、そこで話し合ったことを提言フォームにてまとめていこうとしている。そして、企業も含めマルチステークホルダーで、世界会議の場で公式サイドイベントの枠をとって日本の ESD の特徴や目指すべき方向性などをアピールできればと思っている。

## ● 中部 ESD 拠点のこれから

### ～古澤礼太さん（中部 ESD 拠点協議会事務局長）

中部 ESD 拠点は、世界 129 か所、日本 6 か所の ESD 地域拠点の中の一つである。地域拠点ではフォーマルとインフォーマル教育の横のつながりや、小中高大のような学校間の縦のつながりを作っている。国連が、持続不可能な社会の現状を解決するための即効性のある方法の限界を認め、ボトムアップの教育で解決していこうと考えて設立された。私たちが中心になって地域から進めていくことが大事である。中部の対象地域は伊勢湾と三河湾に注ぎ込む川の流域による区分である「伊勢・三河湾流域圏」である。川の上流・中流・下流のそれぞれの問題やグローバルな他の地域とのつながりを進めている。一つの活動として「伊勢三河湾流域 ESD 講座」というのを 2 年前から始めている。それぞれの上流中流下流で様々な象徴的な課題を取り上げて、小中学校や高校、NPO 等と一緒に地元の取組みを学ぶという講座を実施している。環境だけではなくまちづくりや経済的なことまでテーマにしている。中部 ESD 拠点は、世界会議の開催地の地域拠点であり、非常に恵まれた機会なので、ESD 推進の「開催地モデル（中部モデル）」を作って、何らかの形で国際的に提案して議論していきたいと考えている。伊勢三河流域圏の様々セクターが分科会を始めて、それぞれの ESD の発展を考えている。さらに横につなぐ横断型テーマとして国際協力や伝統知をテーマに研究や活動をしている。GAP にも「地域コミュニティ」について明記してあるが、国連「ESD の 10 年」は当初から地域文化を大切にしたい社会づくりの必要性が説かれている。中部モデルは、8 月から 3 回ワークショップを行い、仕上げていく。ぜひご参加いただきたい。

## 質問

フロア： ESD は人権が大きな比重を占めている。ぜひとも日本が世界のリーダーシップをとって世界の人の生存権の保障を訴える必要がある。また、若い人には、技術者として SD を勉強しながら日本から世界の皆さんに広めてほしい。公害問題での教訓を伝えてほしい。それが国際協力につながる。ある企業の株主総会で ESD を定款に入れるべきだと発言したが、反対の決議となった。企業が ESD に取り組まないといけない。世界会議の開催地であるので、中部経済界や大学が前面に協力してポスト ESD につなげていかないといけない。ものづくりと環境づくりをこれからすすめていくべきである。ここに外務省がないことがすごく残念である。

フロア：環境面からの政策的支援は多くの人に取り組んでいるが、名古屋 NGO センターも ESD に取り組んでいて、参加型体験型答えのないアプローチを進めている。現場、地域には名古屋 NGO センターに加盟している NGO がたくさんある。そこを活用したほうがよい。NGO をつなぐ役目の NGO センターは ESD に貢献したいと思っている。NGO は市民側の立場である。行政の限界を超えるためにも市民を盛り上げて、行政間で越えられない壁をこえていく。そのなかで市民側に期待することは何かを行政の方に聞きたい。

環境省：歴史も浅く、人も予算も少ないので、市民や NPO などと連携しないとできない役所だと自負している。ESD 人材育成のガイドブックを作ったねらいは、学校と地域の連携を根付かせるためである。環境省に出来ることはそのくらいだが、根付けば、地域の人たちが味方になってくれると意識している。

フロア：自己肯定感に関連するが、私は公務員であり、最初に学んだのは公僕であるということであった。みんなに公平にと。どの声を重要視したらいいのか、自分の考えで動けない状況にある。日本人はお上の言うことを絶対視する考え方ではなく、むしろお上に対して意見をどんどん言っていくという姿勢を市民側が持たないといけない。行政が全て責任を持つのはよくないと考える。

中部 ESD 拠点：大学で ESD を担当しているが、ESD は担当者を付けるのが難しい。大学も行政もいろんな部署がある。そこで ESD を担当しろと言われても難しく、世界中に縦割りはある話であり、難しい問題である。だからこそこういう会議でつながれる人からつながっていく。行政の方も今日は多く参加しているので、こういう場を利用していく。行政の人は ESD のみならず、それぞれスペシャリティーを持っているので、得意分野から相互に学ぶことが大事である。

フロア：ESD を説明しないといけない時が多々あり、自分なりに本を読んでいるが、E と S と D のそれぞれに重みがあって、日本人の方は S に重点を置いていると理解している。少なくとも、S と D は重さが同じで、もっとそれを強く言わないと正しく理解されないんじゃないかと考えていた。今日は DEAR の方の話を聞いて、「開発教育」をしっかりやらないといけないとおっしゃっていただいて、よく分かった。S と D をバランスよくしていくことが難しいことだと分かった。そこで E が出てくる。担当者を付けるのが難しいという話があったが S と D でそれぞれ担当が違う。E になるとまた違っている。国や県や名古屋も部署が違って、誰も受ける人がいなくて困っている。だから拠点に強い期待があるのではないかと。県も頑張っていこうと思う。これが感想。みなさんに説明するときに言った方がいいと思うことは、ESD の 10 年は日本が言い出したことである、ということ。そして最終年会合を日本は誘致したということ、である。そして、愛知県は愛知名古屋に誘致したという経緯がある。ESD は日本の「国益」に合致するし、愛知県の「県益」にも合致するものなんだろうと思う。「自己肯定感」は輸入された概念ではなく、日本人がもともと持っていた「心」を世界に輸出していこうということではないか。そうやって理解した方がわかりやすい。大震災の時も日本人の行儀のよさに世界中の人が感心した。デンマークの人も儒教的な東の国に注目しているし、それぞれのいいところを知りあって、持続可能な地球をつくっていこうとするのが大切である。そういう理解に達した。最近の日本人だめだけではなく、日本のいいところを考えたほうがいい。

## ●ゲストコメンテーターよりメッセージ

中村絵乃さん

素晴らしいなと思った。今までの生物多様性や愛・地球博の積みあがってきたものがあることが見えた。自治体やいろんなマルチステークホルダーがいて素晴らしい。愛知に期待しているし、世界会議が行われるってことはすごいことである。

ヨハネスブルグでは世界中の NGO が来て、ESD について議論したり、ワークショップをしたり、展示ブースもたくさんあった。いろんな方が参加して発信していた。そういう意味で 11 月は大注目である。GAP にも優先行動分野が入っていて、ESD を教育と開発の両方に入れていきましょうと書いてある。さっきやりましようと言ったことがもうすでに書いてある。そうしたら「書いてあるんだからやらなきゃだめ」と私たちが声をあげていくチャンスになる。せっかく機会をいい風に考えて盛り上げていきたい。今日は楽しかった。また今後ともよろしくおねがいします。

伊藤通子さん

本当に今日は楽しかった。こういう活動は無力感に襲われたり、対話しなくなったり……。でも孫が私くらいの歳になったときに「ばあちゃん、いい世界をありがとう」って言ってくれるくらいのことしたいという気持ちが、あっちいたりこっちいたりしながらやっている活動である。マルチステークホルダーが地域に根ざして考え、フロアーからもたくさん意見が出て、本当に私自身が元気づけられた。なによりも嬉しかったのが、最後に技術系の方が発言してくださったこと。私の知りあいも参加してくれて、それが嬉しくて。今日はお呼びいただき、ありがとうございました。明日からまたよく分からないけど、やりましようという感じで、今日は帰る。ありがとうございました。

## 参加者からのメッセージ

- 自分の頭で考え、自分なりに判断するための教育。
- 動物の事をもっともっと知りたい。とくに象。
- 自己肯定を軸に据えた ESD をつくり上げたいと思っています。星野和広
- ESD という概念を前面に出すのではなく、生活の中の身近に考えられるものを基準に ESD を広めていって欲しい！
- 各省の壁を取り除いて。言い続けることが肝心ですね。小さい力が「山」となれるよう「灯」となるように。
- お世話になります。名古屋城外堀ヒメホテル & 小学校教員 守ってみえた方と交流のあった子どもたち～現在の子ども親御さん等世代を超えた子どもたち→ESD だと思うのですが。ホテルを見にこられる温かい多くの方々 ESD で思いを伝える場とかわからない困っている場とかあまりなくて、何かやりたいけれどモヤモヤしている。
- 子どもたちに伝えていきたい「人とのつながりを大切に」たくさんの人と積極的に出会い、“我もよし人もよし”認め合えるつながりを……。自分がやっている表現活動を通し、つながる喜びを感じていきたい。人が笑えば自分も笑顔になれる。そんなふうにつながり広がっていければ……。人を思いあい、環境を考えあう世界になっていくのではないかと願います。
- 「開発」を持続するために何が必要であるかを技術的にわかりやすく説明していきたい。ケーテック株式会社木村正彦
- 今の自分でも生きていく。すぐすぐがんばる。
- わたしはということをやっていくのか。一人ひとりの子どもにしっかり向き合っていくことが子どもたちが無限の可能性を発揮でき、まわりの人とつながっていくこうとする生き方につながると思い、日頃とりにくんでいます。今日のコラムで学んだことを生かしてとりにくみを深めていきたいと思います。ありがとうございました。
- いつでもどこでも誰とでも ESD 実践者であり続けたいと思います。教員は異動があります。1 人の教師としてどこでも実践者であり続けたい。そしてこれまで出会ってきた ESD 仲間との“つながり”を大切にしていきたいです。
- 「ちりも積もれば山となる」身近なこと、何気ない小さな活動を結集させて、少しずつ活動を大きくしよう。家族、親戚、友人、関わりやすい人からつながりを生み、少しずつ歩む草の根的な関係づくりで ESD の担い手の輪を広げよう。
- もっと地域密着に！
- 高等学校の教員です。ここ数年、一生けん命種を蒔いてきました。その種のいくつかが強芽吹いて(生えて)いることを感じました。次の 10 年は土をたがやしていきたいと思います。ぜひ「光」を当ててください。中村羊大
- ESD は幼稚園から大学までの一貫教育が大切です。組織を超えた体勢作りを進めてください。人づくりに国や自治体が十分な投資をすることが未来をつくる近道であると考えます。
- ESD に関する認知度がまだまだ低いと思う。サイトだけでなく TV、校内での広報に力を入れて欲しいです。大学生の認知度を上げていければもっと力になると思います。
- 日本すべての大学キャンパスの自然エネルギー 100%にする！すでにいくつかの大学で学生がうごきはじめている。学生や大学がかわれば社会もかわるというメッセージを発信していきたい。
- 榊原洋子 1 SD を ESD に変えること 2 大人に対して ESD を意識の落とし込み 3 若い人への ESD の普及。10 年以降も旗を振り続けます。
- 企業としての ESD≒CSR としてとらえています。10 年程前から意識して経営しています。ものをつくれれば売れる時代からものがあふれる時代。今求められる企業の姿……。もちろん利益の還元が第一ですが、社員やお客様、社会の幸せのために貢献する姿だと思います。幸せは貢献感の中にあります。今までもそしてこれからも自己目的をもって貢献していきたいと思いました。E 永遠に S 幸せになる D 努力をしながら持続可能な会社作りをしていきます。ESD!市民に未来社会のための政治的決定力を。

- 福島の子どもたちに ESD 教育を。子どもの参画促進。自治体・役員・企業の女性率 UP。ESD センターを中学校区に
- だれもが「当事者意識」の持てる社会へ 名古屋わかもの会議代表 法政大学 2 年水野翔太
- ESD に現場で取り組む多岐にわたる分野の人々の協働の場、共通の目標が確認できる場も今後作れるといいですね。
- 強制的に小学校で ESD 教育をする。英語で授業をすとかになっているが、ESD のが大切だ！自分たちが社会をつくっているんだ、とのことを気付かせる！
- 企業を巻き込んだ期間を設けず ESD 活動。自然・動物など東山動物園(名古屋の貴重な場所)をもっと皆に伝える。
- まだまだこれから。私が 20 年経ったら・・・いや経ってもいつまでもおいしい空気が吸えますように。
- 若者が ESD のような活動について知ることができるきっかけがもっとあると良いと思う。
- 若者と大人が様々な事について話し合う機会がもっとほしいです。特に ESD について。
- 「対話」の場をもっと多く！！意見の言いやすい場を！！若者の意見を聞いて！！夢の叶いやすい社会を！！夢を叶えて社会にはばたきます。
- ESD を将来の子どもたちへ。今のオトナたちへ。
- 地域と企業とがつながる。
- 様々な立場の方がこのように意見を言い合うことも無いという状況が多くあって欲しい。(それぞれがガイドブック等を作成している時点でいわゆる「縦割り」を感じた次第です)一般の方に情報を伝える立場になる時もあるので(業務の中で)本日学んだことを生かしていきたい。
- 参加・行動・発信で行政の限界の壁を低くする。
- ESD は個人の資質の向上を計る教育である。企業・政府のトップダウン事業に負けない地球・地域が持続する社会であり続けるためのチェック&行動できる人間が多くなければならない。ピラミッド社会の専門家と平民に分離される都市型無責任人間の社会から日本古来の長老・村長を中心にした輪型和の社会。1 人の人間がマルチに仕事をこなす共同・協力する人間社会。村落型の人が必要。地域おこし協力隊、JICA 青年海外協力隊のようなマルチ人間体験者を育成することが必要。自衛隊予算を協力隊事業にあてるべきだ！
- 省庁の枠に捉えられない NGO,NPO 自治体に対する ESD の支援を！
- 世界とのつながりを感じられるような地域づくりをしていきたいです。自分のちょっとした行動が世界を変えろという実感を持てるようにしたい。
- 大学生のために学びの修復をすすめよう。受験のためでなく、人の幸福と社会の平和のために真に学び考えるチカラを修得してほしいから。
- 学校に関係なく ESD 等社会活動を学べるフレキシブルな教育環境を整備してください！！
- これからも社会活動を続け、住みやすい世界をつくってきたい。もっと自分の意見を言える場が欲しい。学校に ESD 広めたいな。
- 自意識のない ESD 活動はたくさん行われている。ESD 的認識で活動していた人は自分の意識の何を変えていいのかわからなかった。愛知教育大学の共通科目の多くは ESD として成り立っているという認識に立つことができた

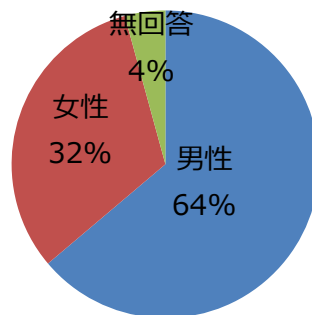
# アンケート結果

ESD2014 ～地域に何を残し、今後どう動くか～ 参加者アンケート 回答者：47名/141名（33%）

## 1.参加者について

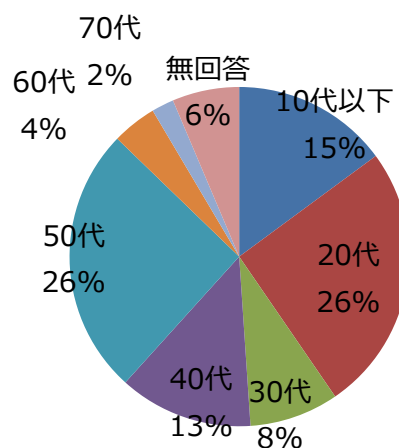
### [性別]

男性	30名
女性	15名
無回答	2名
合計	47名



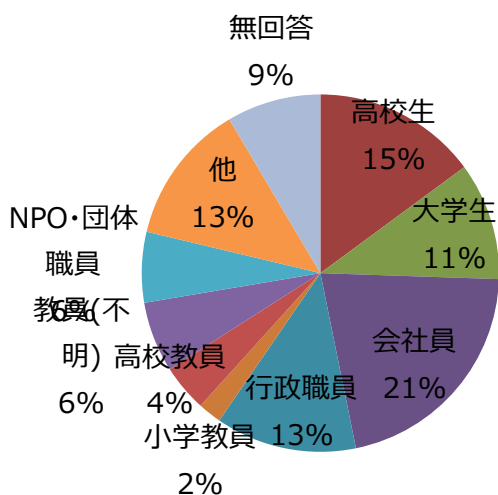
### [年齢]

10代以下	7名
20代	12名
30代	4名
40代	6名
50代	12名
60代	2名
70代	1名
無回答	3名
合計	47名



### [所属]

中学生	0名
高校生	7名
大学生	5名
会社員	10名
行政職員	6名
小学教員	1名
中学教員	0名
高校教員	2名
大学教員	0名
教員(不明)	3名
NPO・団体職員	3名
他	6名
無回答	4名
合計	47名





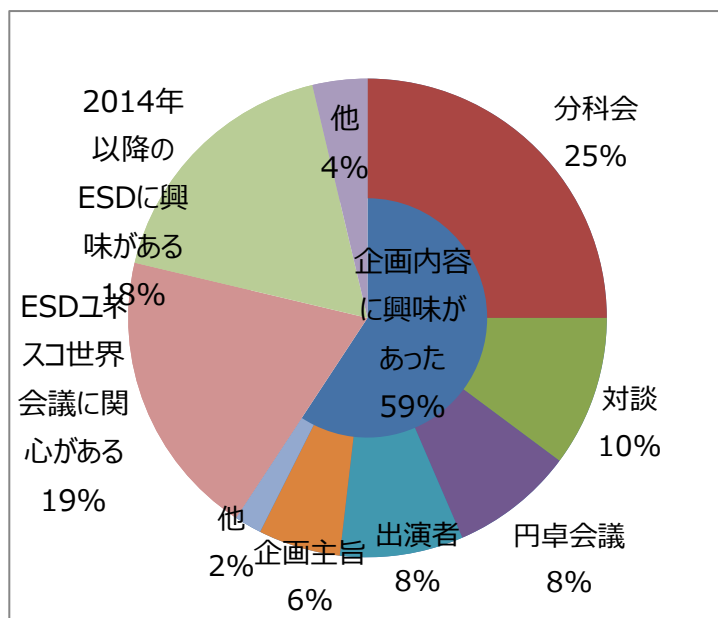
## 【「他」の内容】

- 大学研究員
- 会社経営
- 元教員
- 自営

## 2.本フォーラムへの参加動機をお聞かせください(複数回答可)

企画内容に興味があった	分科会	27名
	対談	11名
	円卓会議	9名
	出演者	9名
	企画主旨	6名
	他	2名
ESD ユネスコ世界会議に関心がある		21名
2014年以降のESDに興味がある		19名
他		4名

■ 企画内容に興味があった



### あつた：「他」の内容

- ESDについて勉強するため

### ■「他」の内容

- 母に連れて来られて
- お声がけをいただいた。
- 出演依頼を受けた。新海さんの願いは断れません。
- たまたま時間が合ったため。

## 【具体的にお聞かせください】

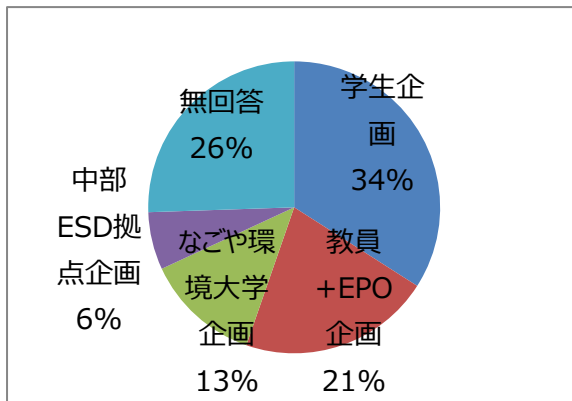
- 学校で ESD をきいたことはないらしい。でも先生も一人の人間だから興味いろいろで関心がないのかな？学校にコーディネーターを派遣して教えて(伝えて)いくべき。本当は大人の教育が必要だけど・・・
- やはり2015年以降も続けなければ10年の価値がない。この10年もそれほど社会に与えた効果はそれほどあったとは思えないので2015年以降は社会全体がESDに基づいて動いていくようにしたい。
- 県内の色々な高校生と意見交換がしたかったからです。また大人の方々の話も聞きたかったからです。
- やっと認知されはじめたESD。これ以降の反映の仕方に関心あり。
- 新海さんより伊藤です。
- 広く深く・・・推進されている活動に対して参加し、今後の展開もご指導願いたいと存じました。
- 本年は国内にてESDを議論する世界会議が催される年であり、新聞を始め、メディアでもESDの広報が多く見られていることから関心を深める目的で参加しました。
- 11月に名古屋の底力を。
- 2014フォーラム終了後の世界とのSD交流するしくみが気になる。
- 若い人が意見する点に興味。
- 「対話」の場があってよかった。

- 新海様にご紹介いただきました。
- ESD の活動や考えについて色々な人の話を聞きたかった。
- 発表者
- 新海様よりメールいただきました。
- 地域と世界のつながりを考えるから地域づくりを行っているので、ESD に興味がありました。
- 学生のときから環境問題について勉強し、働き始めてからもずっと携わっていることの一つの切り口としての「ESD」ということについて勉強するため。

### 3.本フォーラムについてのご感想についてお聞かせください。

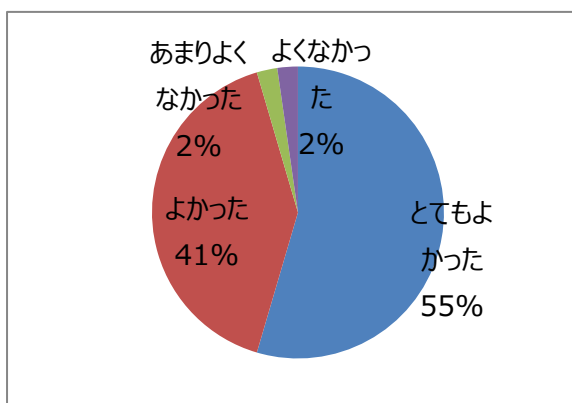
#### 【参加分科会】

学生企画	16名
教員+EPO企画	10名
なごや環境大学企画	6名
中部ESD拠点企画	3名
無回答	12名
合計	47名



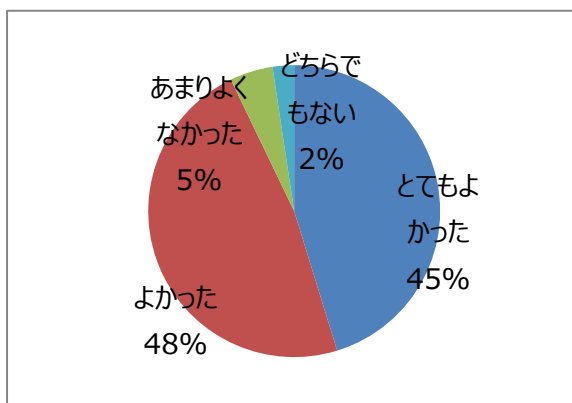
#### 【感想：分科会】

とてもよかった	24名
よかった	18名
あまりよくなかった	1名
よくなかった	1名
どちらでもない	0名
合計	44名



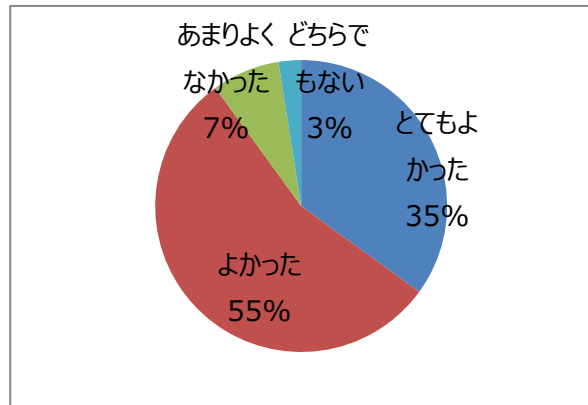
#### 【感想：対談】

とてもよかった	19名
よかった	20名
あまりよくなかった	2名
よくなかった	0名
どちらでもない	1名
合計	32名



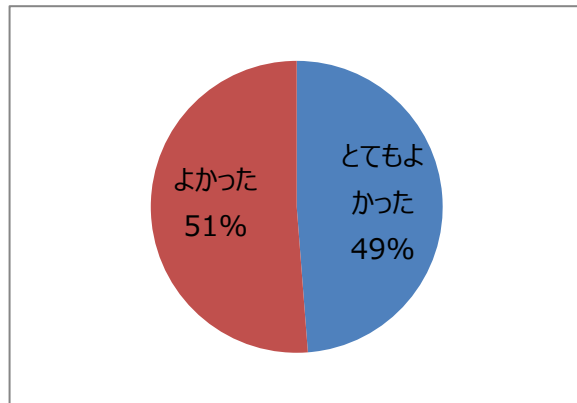
**【感想：円卓会議】**

とてもよかった	14名
よかった	22名
あまりよくなかった	3名
よくなかった	0名
どちらでもない	1名
合計	40名



**【感想：フォーラム全体】**

とてもよかった	20名
よかった	21名
あまりよくなかった	0名
よくなかった	0名
どちらでもない	0名
合計	41名



**【理由をお聞かせください】**

- こういったフォーラムに参加することが自分にとっての ESD であると思う。
- これだけ ESD を教えている人が集まりビックリ。よかったな。
- 教育だけでなく環境だけでなく。人権も(自己肯定感)大切に、各セクター全体で取り組んでいこうという姿勢が感じられる企画でとてもよかったと思います。
- 分科会では様々な取り組みをしている高校生の方々と話し合えるというとても貴重な機会を得られ、とても充実したものとなったからです。また大人の方々の話を聞けたからです。ESD というものについて考える良い機会になりました。
- 自分と同じ高校生がどんな意見を持っているのか、どんな活動をしているのかというようなことが聞けたのが良かった。
- 分科会のまとめを円卓会議で発表し、情報共有できたこと(振り返りの大事さ)たくさんの知を頂きました。開催おつかれさまです。
- 教員、学生、NPO と多様な顔ぶれの方々よりお話を聞かせていただき、多様な視点や教育推進への方法に出会う機会となり、有意義な時間を過ごせました。国や自治体が旗を振り続けても推進は難しく、答えがないだけ市民それぞれが輪になって自分たちの答えを生み出していくというお話が印象に残っています。
- ひとことお話ができて良かったです。
- 中村さんと伊藤さんのお話が良かった。
- 分科会 4 ではもう少し時間があれば良かったが、自己発表・意見交換ができて良かった。
- つながること、情報発信について一段と議論を深めることができたから。
- 様々な世代の人の意見が聞けた。
- いろんな方の考え方を聞くことができた。
- 明日の授業に活かせること、たくさん吸収できました。

- 今興味があることが、いっぱいまっている内容で参加して大変良かったです。
- 色々な人の考えがわかった。
- 環境大を考えるよいきかいとなった。
- ポスト 2014 について知りたかったです。
- 実際の授業の様子を映像や模擬形式で見学し、勉強させて頂きました。
- 大きな刺激をもらいました。
- ESD を推進する力を得た。
- 多くの方の話を聞くことができ、また新しい考えや参考になることが多かったです。
- 自分と同じ立場の人だけでなく、産官学に加え市民団体の活動等を中心にする人など多くの人の意見を聞き、学ぶ事ができたから。
- 新しい考え方に触れることができた。
- とても有意義な一日でした。次回も楽しみにしています。
- ESD についてディスカッションする機会がなかった。印象に残った。
- 様々な方の意見を聞けたので、自分の ESD の知識が深まり、とてもいい機会となった。
- ▼円卓会議の分科会での報告として行政、システム構築に片寄っていたと思う。若者や先生、企業、地域の末端の部分の声が全体会で聞きたかった。
- ▼ESD という言葉の浸透度合はまだまだこれからかもしれませんが、ESD 的な考え方は市民に根付いている気がします。それで充分ではないでしょうか。円卓会議の話がイマイチでした。
- ▼もっと時間があればなと思いました。
- ▼円卓会議では、ESD のことの構造が複雑で ESD のことがわかりにくくなった。ただ分科会や対談では身近な問題に触れられてとても良かった。
- ▼実践はどれも興味深かった。グループ内の話し合いの時間がもっとほしかった。

#### 4.本フォーラムに参加されてのご提案、気づかれたこと、改善点、今後の ESD 企画のご要望などお聞かせください。

- ESD の本会議が終わったあと、ESD がどうなっていくのかが心配。
- 今の 30~50 代をどうにか動かさないとこの先危険かも。その次に高大学生かな？ちょっと豊かになりすぎなので危機感が足りない、また感謝も足りない。だから ESD が伝わらない。
- 上記のとおりとても良い(それまでの一般的な ESD というイメージを破った)内容だったのでそういう想いが強く、特に提案などはすぐに思いつかないが、現場レベルの分野を超えた交流や協働の機会をつくれるとさらに ESD は広がっていくと思います。
- はじめは ESD は環境教育の部類かもと思っていたが、このフォーラムでもっと道徳的なこと・・・とも気づいた。行政として環境部門だけでなく教育委員会等の参加、また別の立場として [民間企業の参加ができるフラットな形の企画があればと感じた。
- 地域の蓄積ができていたと思った。様々な立場の方々と一緒に考える場づくりになっている。実質的によりよい方向に動くように戦略的にできるとよいと思う。
- 次は質の時代ですね。イベントしつつ足元。情報収集、活用する力、議論や対話の力、評価の力この3つが私たちはとても弱いことを自覚して、少しづつ作業になりますが、これをきたえることを平行してやらなければそこにまた ESD 格差が生まれてしまいます。今集まれている人々はきっと ESD トップクラスの人々。さて次の 10 年がんばり続けましょう！
- 自分の中で理解していた ESD に対する答えを見つけました。正解はないけど「プロセスと心はつなぐ・・・」と思っています

す。四国から世界につなが・・・大きな夢を持ちつづけたいと存じます。

●意識の高い人たちの集まりだったとも思います。円卓会議でも取り上げられましたが、「持ち寄り」は充実していたので、ここで得たものをそれぞれが「持ち帰り」広めていければと思います。学生など若い人が思いのほか多く参加しており、嬉しく、力強く感じました。

●実践報告として「活動初年度に比べどれだけ事業を拡大できたか」「我々の団体で作成した教材がいくつの都道府県で活用されていてこんな活用をされている」といったより具体的なエピソードが聞けると尚良いです。「担い手の育成には何が良いか」というテーマで実践されている方々の間でトークを広げていただくことも聴講する人々に刺激となって良いと思います。

●ESD のことをもっと若者目線で、知らない人にも理解される円卓会議などになれば話が聞きやすくなるのではと思った。

●継続は力なり。

●経済とか建設関係とかとのクロスセッションを希望します。

●・NGO 外務省 JICA の参加があれば、・行政の仕組みは都市型ピラミッド式トップダウンの壁をつくるしくみだが、日本の村社会はジョーモン時代からの長老村長中心のサークル型・和の社会。その中で生きる人間も専門家社会とマルチ人間社会とみなすことができる。今の時代はマルチ人間が不足しているのではないだろうか。

●ESD いろいろな活動が ESD に位置づけられることがあらためてわかりました。拠点のレジとは、ESD を知らずに活動している人たちに対して「あなたの活動が ESD」と認定することだけでもすごくじゅうじつしたものになるのでは？

●若者だけではなく、いろんな世代の人とディスカッションをしてみたい。

●こういう「対話」の場がもっと増えるといいと思います！！

●「授業をやるなんてできるかな・・・」と心配があつて、このおはなしを受けました。今日みなさんが真剣にこうしたらいいよとアドバイスをもらい「やってよかった」と思えました。我々教員は「現場で子どもに生かしてこそ」と思っています。今日の出会いを大切に、明日からの実践に生かしていきます。

●このような素晴らしいフォーラムをご紹介いただき参加できて大満足です。いろんなところで結び付いて話をさせていただく機会がありますので今日のことを生かして取り組んでいきたいです。いつも ESD のことを考えて生活していきたいですし、広がっていくよう私たち精一杯努力していきたいです。本当にありがとうございました。今後ともよろしく願い致します。

●大学生が簡単に参加できるようなセミナー等がほしいです。

●こどもも意見ほしい

●午前中分科会のみ参加。時間的に詰め込みすぎて内容のある議論ができずちょっと残念でした。

●本日はありがとうございました。またこのような会があればお知らせください。

●ESD ボランティア応募しました。力になりたいです。頑張ってください。応援してます。

●プログラムに場所の記載があるととても分かりやすかったと思います。名札は不要では？お昼ごはんを食べに出るときにじゃまでした。せめてネックストラップにすべき。

●名古屋は活気があって感動しました。市民と若者のエネルギーを感じました。

●ESD について様々な視点、異業種の方々から学ばせていただき、とても充実した時間をすごさせていただきました。ありがとうございました。

▼もう少しやわらかい感じでやるとたくさんの意見がでると思います。

▼開始時刻がわかりにくく、10:00 に行けず残念でした。

▼対話時間をもっととった方が良かったかも？

▼分科会でのワークショップの時間がもうすこし多い方が良かったです。

- ▼内容はとても良かった。運営にスタート時間だけは必ず守るようにしたほうがいいと思います。(遅れる人はその人がいけないです。100人近くの人に来る時にはなおさら)
- ▼資料が多すぎると感じました。
- ▼時間管理をしっかりすべき。円卓会議ではパネリストが多すぎて薄い。



発行日：2014年7月31日

発行：環境省中部地方環境事務所

企画運営：環境省中部環境パートナーシップオフィス

〒460-0003 名古屋市中区錦 2-4-3 錦パークビル 4階

TEL 052-218-8605 FAX 052-218-8606

E-Mail office@epo-chubu.jp HP <http://www.epo-chubu.jp>